

千葉県文化財センター

研究紀要

15

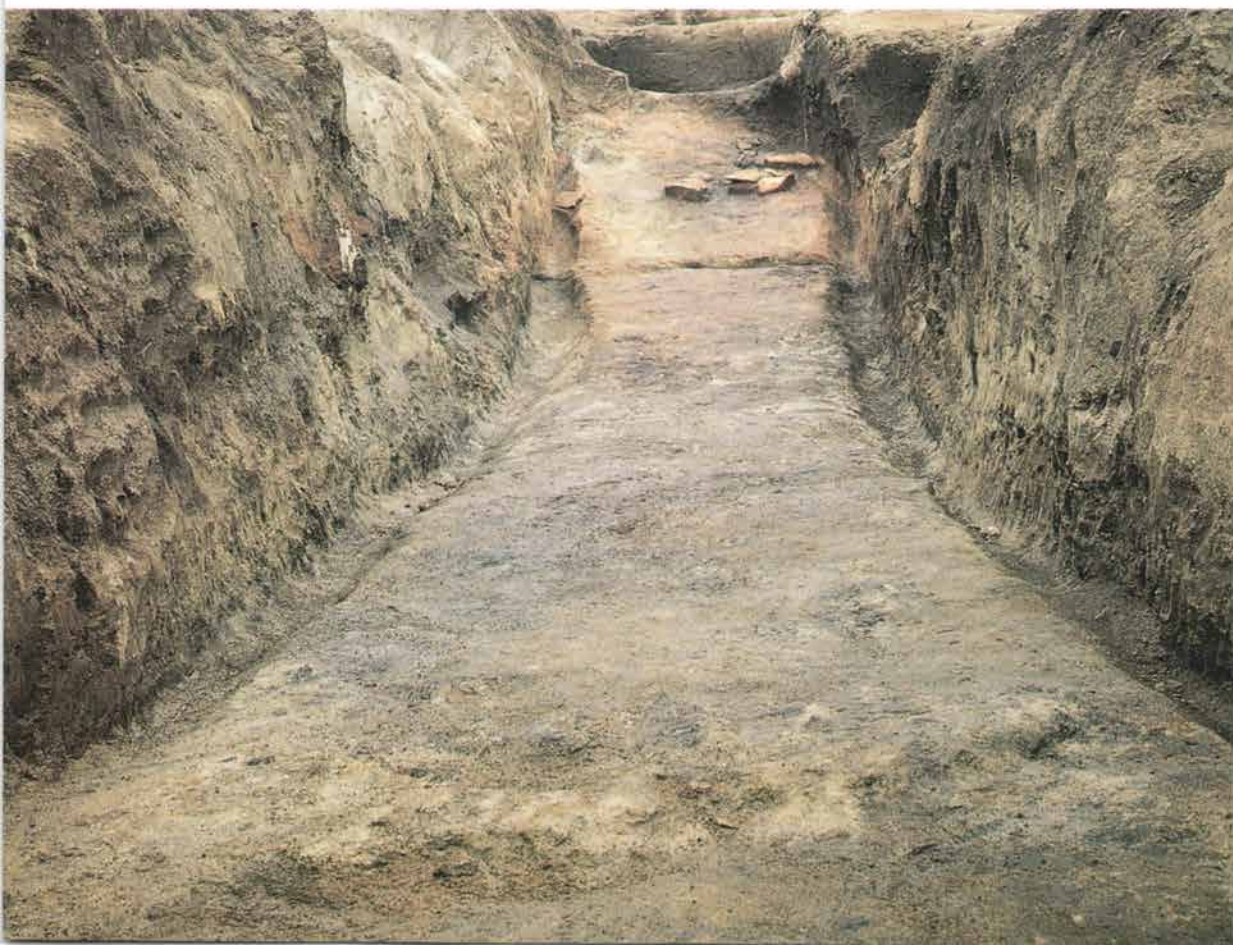
平成6年3月

財団法人 千葉県文化財センター

卷頭 凶 版

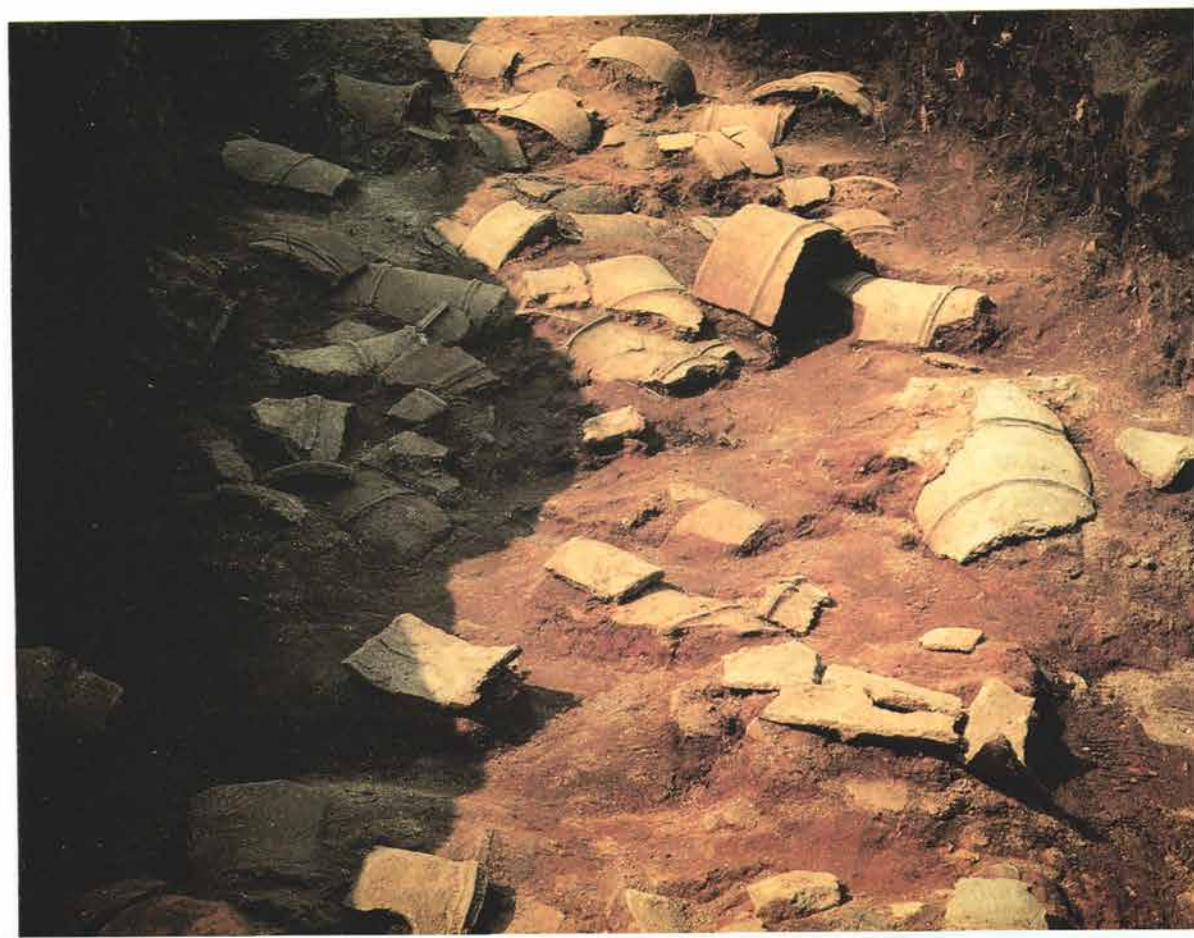


公津原埴輪生産遺跡埴輪窯跡全景 (51-001)





公津原埴輪生産遺跡埴輪窯跡遺物出土状況





50-001全景



50-003全景



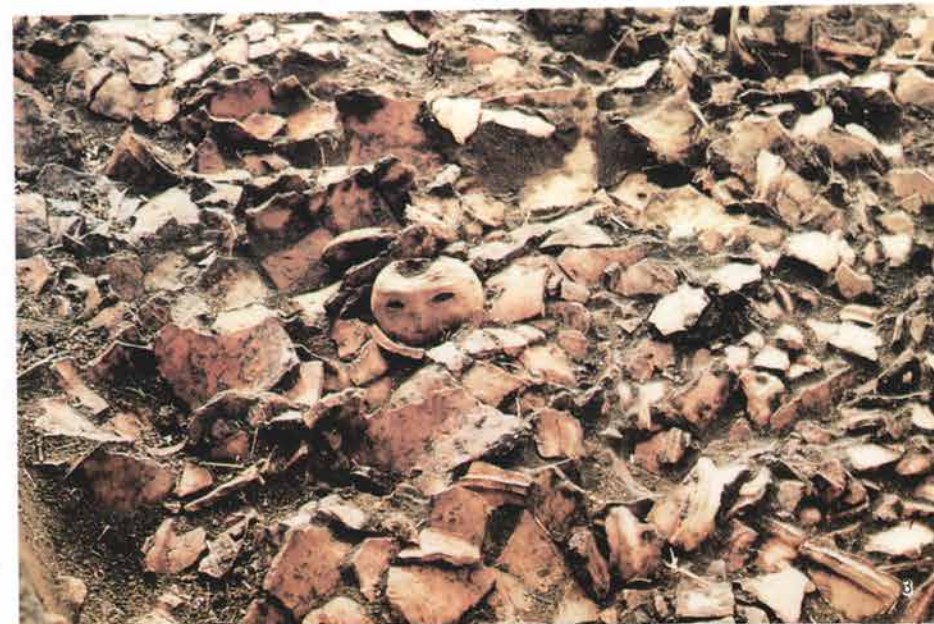
51-002全景



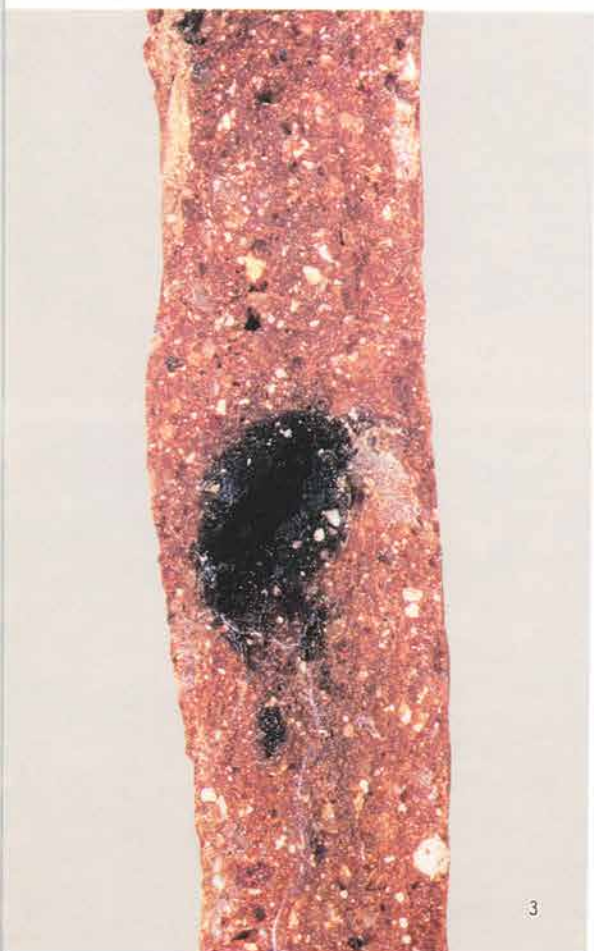
瓢塚32号墳
埴輪出土状況 (1)



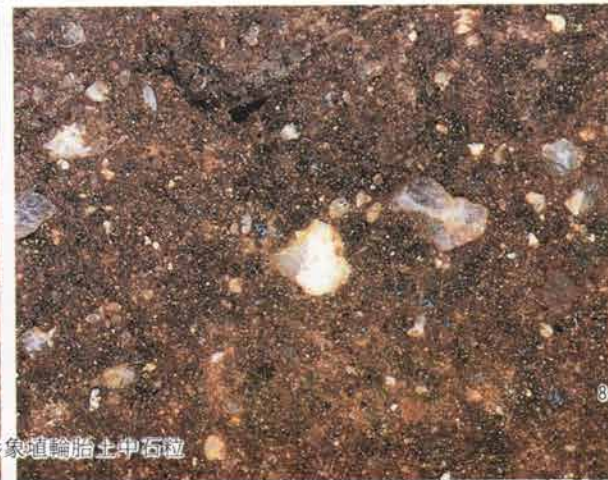
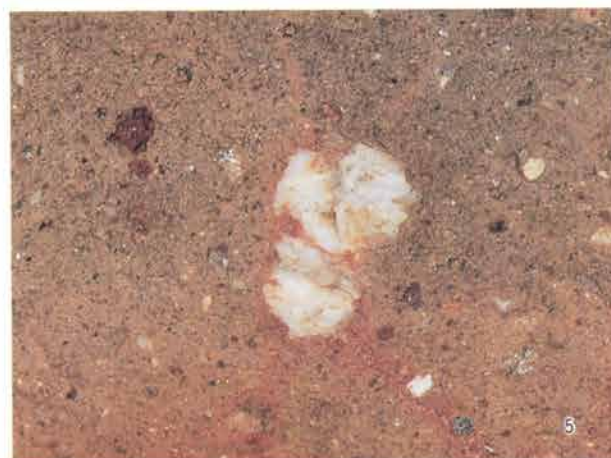
瓢塚32号墳
埴輪出土状況 (2)



瓢塚32号墳
埴輪出土状況 (3)



公津原埴輪生産遺跡 胎土中炭化繊維





畑沢埴輪窯跡遺物出土状況
畑沢埴輪窯跡出土形象埴輪群





畑沢埴輪窯跡出土馬形埴輪（左側面）

畑沢埴輪窯跡出土馬形埴輪（右側面）





畑沢埴輪窯跡出土馬形埴輪（上面）

畑沢埴輪窯跡出土盾持武人形埴輪





畑沢埴輪窯跡出土蓋形埴輪 1

畑沢埴輪窯跡出土蓋形埴輪 2



発刊の辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究および普及活動を実施してまいりました。その成果は、多くの発掘調査報告書等に発表しているとおりでありますが、研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめとして独自の調査・研究事業をすすめてまいりました。

研究事業の中心である研究紀要は昭和62年度から、第Ⅲ期計画として「房総における生産遺跡の研究」という統一した主題を選定し、瓦、玉、須恵器および埴輪の4回に分けて調査・研究することとしました。これは、県内から出土した資料を収集し、調査・研究するとともに各生産遺跡相互、あるいはまた、生産と消費のかかわりを解明することを目的とするもので、平成2年度に瓦、3年度に玉をテーマにそれぞれ刊行しました。

平成5年度はすでに第14号として須恵器編を刊行しましたが、つづいてここに第15号として埴輪について、県内の出土例を中心に、これまでの出土資料を集成し、いくつかの視点から検討を行いました。

最近の各種開発事業に伴う埋蔵文化財調査の結果、多くの古墳が調査され、埴輪を有する古墳もまた従来とは比較にならないほど多く知られるようになりました。古墳は墳丘、主体部、副葬品、埴輪等多くの要素で構成される複合的な文化遺産であります。そのなかで、埴輪に注目し、その生産と消費の実態に迫る試みは、まことに時宜を得たものと考えております。

本書が、考古学の研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料としても広く活用されることを期待します。

平成6年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥山 浩

目 次

生産遺跡の研究 4

—埴 輪—

発刊の辞	理事長 奥 山 浩
はじめに	3
1章 序論	7
1節 埴輪研究の現状と課題	8
2節 房総における埴輪研究	12
2章 各論	19
1節 房総における埴輪出土遺跡	20
2節 公津原埴輪生産遺跡	30
3節 畑沢埴輪生産遺跡	76
4節 千葉県内の古墳出土埴輪の蛍光X線分析	130
3章 総論	159
1節 房総における埴輪の変遷と分布	160
2節 房総における埴輪の生産と流通	178

挿図目次

第1図	千葉県内埴輪出土古墳・窯跡位置図	20
第2図	公津原埴輪生産遺跡位置図	31
第3図	公津原埴輪生産遺跡周辺地形図	32
第4図	公津原埴輪生産遺跡遺構配置図	34
第5図	51-001実測図	35
第6図	51-001遺物出土状況	36
第7図	51-002実測図	37
第8図	50-001実測図	38
第9図	50-002、50-003実測図	39
第10図	51-001出土円筒埴輪 1	40
第11図	51-001出土円筒埴輪 2	41
第12図	51-001出土円筒埴輪 3	42
第13図	51-001出土円筒埴輪 4	43
第14図	51-001出土円筒埴輪 5	44
第15図	51-001出土円筒埴輪 6	45
第16図	51-001出土円筒埴輪 7	46
第17図	51-001出土円筒埴輪拓影図 1	47
第18図	51-001出土円筒埴輪拓影図 2	48
第19図	51-001出土円筒埴輪拓影図 3	49
第20図	51-001出土円筒埴輪拓影図 4	50
第21図	51-001出土円筒埴輪拓影図 5	51
第22図	51-001出土円筒埴輪拓影図 6	52
第23図	51-001出土円筒埴輪拓影図 7	53
第24図	50-001出土円筒埴輪	54
第25図	竪穴遺構出土円筒埴輪拓影図	55
第26図	51-001出土朝顔形埴輪	56
第27図	51-001出土朝顔形埴輪拓影図	57
第28図	51-001出土形象埴輪 1	58
第29図	51-001出土形象埴輪 2	59
第30図	51-001出土形象埴輪 3	60

第31図	豎穴遺構出土形象埴輪	61
第32図	50-003出土土器	61
第33図	豎穴遺構出土土製品	62
第34図	瓢塚32号墳埴輪集中部	66
第35図	瓢塚32号墳埴輪集中部出土円筒埴輪 1	67
第36図	瓢塚32号墳埴輪集中部出土円筒埴輪 2	68
第37図	瓢塚32号墳埴輪集中部出土朝顔形埴輪	69
第38図	瓢塚32号墳埴輪集中部出土形象埴輪 1	70
第39図	瓢塚32号墳埴輪集中部出土形象埴輪 2	71
第40図	瓢塚32号墳埴輪集中部出土形象埴輪 3	72
第41図	瓢塚32号墳埴輪集中部出土形象埴輪 4	73
第42図	畑沢埴輪生産遺跡周辺の主要古墳分布図	79
第43図	畑沢埴輪生産遺跡周辺地形図	80
第44図	畑沢埴輪生産遺跡全測図	81
第45図	埴輪窯	83
第46図	埴輪窯遺物出土状況	85
第47図	遺構 I・IV・V	87
第48図	遺構 VI・VII・VIII	89
第49図	遺構 IX・II・III	91
第50図	馬形埴輪	93
第51図	馬形埴輪断面	94
第52図	塚廻り 4号墳男子埴輪	95
第53図	盾持武人形埴輪	96
第54図	蓋形埴輪 1	98
第55図	蓋形埴輪 2	99
第56図	蓋形埴輪 3	100
第57図	立飾り	101
第58図	甕	103
第59図	形象埴輪破片資料 1	105
第60図	形象埴輪破片資料 2	106
第61図	形象埴輪破片資料 3	108
第62図	形象埴輪破片資料 4	109
第63図	円筒埴輪	110

第64図	埴輪口縁部破片資料、埴輪胴部破片資料 1	112
第65図	埴輪胴部破片資料 2、埴輪底部破片資料 1	115
第66図	埴輪底部破片資料 2	116
第67図	壺棺	117
第68図	遺構Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ出土土器	119
第69図	遺構Ⅶ・Ⅷ出土土器	121
第70図	遺構Ⅸ出土土器・遺跡一括採集土器	123
第71図	石製品・鉄製品	123
第72図	土製品	125
第73図	縄文土器	127
第74図	埴輪胎土分析試料出土遺跡分布図	134
第75図	にわとり塚 (Ⅰ群) Rb-Sr分布図	135
第76図	成田H32号墳 (Ⅱ群) Rb-Sr分布図	135
第77図	大木台 2 号墳 (Ⅲ群) Rb-Sr分布図	135
第78図	畑沢埴輪窯跡 (Ⅳ群) Rb-Sr分布図	135
第79図	片野23号墳Rb-Sr分布図	135
第80図	弁天山古墳Rb-Sr分布図	135
第81図	Ⅰ群とⅣ群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)	136
第82図	Ⅱ群とⅠ群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)	136
第83図	Ⅰ群とⅢ群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)	137
第84図	Ⅱ群とⅢ群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)	137
第85図	にわとり塚群と生出塚群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)	138
第86図	生出塚群とⅡ群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)	138
第87図	Fe因子の比較	139
第88図	東深井 2 号周溝Rb-Sr分布図	139
第89図	東深井 7 号墳Rb-Sr分布図	140
第90図	東深井不明古墳出土埴輪Rb-Sr分布図	140
第91図	高野山 1 号墳Rb-Sr分布図	140
第92図	高野山 2 号墳Rb-Sr分布図	140
第93図	高野山 3 号墳Rb-Sr分布図	140
第94図	高野山 4 号墳Rb-Sr分布図	140
第95図	子の神 7 号墳Rb-Sr分布図	141
第96図	金塚古墳Rb-Sr分布図	141

第97図	小林城跡Rb-Sr分布図	141
第98図	公津原埴輪窯Rb-Sr分布図	141
第99図	竜角寺112号墳Rb-Sr分布図	141
第100図	城山4・5号墳Rb-Sr分布図	141
第101図	木戸前1号墳Rb-Sr分布図	142
第102図	殿塚古墳Rb-Sr分布図	142
第103図	姫塚古墳Rb-Sr分布図	142
第104図	経僧塚古墳Rb-Sr分布図	142
第105図	小谷1号墳Rb-Sr分布図	142
第106図	山倉1号墳Rb-Sr分布図	142
第107図	高柳銚子塚古墳Rb-Sr分布図	143
第108図	矢那大原古墳Rb-Sr分布図	143
第109図	内裏塚古墳前方部Rb-Sr分布図	143
第110図	永野台古墳Rb-Sr分布図	143
第111図	目沼ひょうたん塚古墳Rb-Sr分布図	143
第112図	船塚古墳出土埴輪Rb-Sr分布図	158
第113図	K, Ca, Fe, Na因子の比較	158
第114図	最終末期の底部穿孔壺形土器	161
第115図	鶴塚古墳出土資料	162
第116図	三之分目大塚山古墳出土埴輪	164
第117図	高柳銚子塚古墳、内裏塚古墳出土埴輪	165
第118図	永野台古墳出土埴輪	167
第119図	御座目浅間神社古墳出土埴輪	168
第120図	東深井2号周溝、花野井大塚古墳、金塚古墳出土埴輪	169
第121図	竜角寺101号墳出土埴輪	170
第122図	殿部田1号墳出土埴輪	171
第123図	典型的な下総型埴輪	172
第124図	下総型埴輪分布図	173
第125図	市原市域の下総型埴輪	174
第126図	上総における2条3段の円筒埴輪	175
第127図	胎土別埴輪分布図	183
第128図	船塚古墳表採埴輪	185
第129図	埴輪供給関係図	187

表目次

第1表	千葉県内埴輪出土古墳・窯跡・遺跡一覧	21
第2表	千葉県の埴輪の分析値	144
第3表	分類結果	151
第4表	船塚古墳出土埴輪の分析値	158

本文写真目次

本文写真1	畑沢埴輪窯跡全景	84
-------	----------	----

巻頭図版目次

巻頭図版1	公津原埴輪生産遺跡埴輪窯跡全景 (51-001)
巻頭図版2	公津原埴輪生産遺跡埴輪窯跡遺物出土状況
巻頭図版3	50-001全景、50-003全景、51-002全景
巻頭図版4	瓢塚32号墳埴輪出土状況
巻頭図版5	公津原埴輪生産遺跡 胎土中炭化繊維
巻頭図版6	公津原埴輪生産遺跡 形象埴輪胎土中石粒
巻頭図版7	畑沢埴輪窯跡遺物出土状況、畑沢埴輪窯跡出土形象埴輪群
巻頭図版8	畑沢埴輪窯跡出土馬形埴輪
巻頭図版9	畑沢埴輪窯跡出土馬形埴輪、畑沢埴輪窯跡出土盾持武人形埴輪
巻頭図版10	畑沢埴輪窯跡出土蓋形埴輪1、畑沢埴輪窯跡出土蓋形埴輪2

図版目次

図版1	朝顔形埴輪1、朝顔形埴輪2
図版2	瓢塚32号墳出土馬形埴輪
図版3	馬形埴輪脚部「蹄」、瓢塚32号墳出土馬形埴輪

- 図版 4 畑沢埴輪生産遺跡周辺航空写真
- 図版 5 遺跡遠景、窯跡付近調査風景
- 図版 6 窯跡断面、窯跡遺物出土状況近景
- 図版 7 窯跡遺物出土状況(1)
- 図版 8 窯跡遺物出土状況(2)、窯跡遺物出土状況(3)、窯跡遺物出土状況(4)
- 図版 9 窯跡第一次焼成面、窯跡第一次焼成面全景、断ち割り状況
- 図版10 遺構 I、遺構 II、遺構 III
- 図版11 遺構 IV、遺構 V、遺構 VI
- 図版12 遺構 VII~IX、遺構 VII、遺構 VII 遺物出土状況
- 図版13 遺構 VIII、遺構 VIII 遺物出土状況、遺構 IX
- 図版14 蓋形埴輪 1、蓋形埴輪 2
- 図版15 馬形埴輪右側面、馬形埴輪左側面
- 図版16 馬形埴輪上面、馬形埴輪頭部、盾持武人形埴輪正面・後面
- 図版17 馬頭部①・②、馬鞍①・②、馬腹部内面①・②、馬腹部外面①・②
- 図版18 馬脚外面、馬脚内面、馬尻尾、馬臀部内面、盾持頭部内面①・②、蓋接続部、蓋内部
- 図版19 甕 1、甕 2
- 図版20 名称・形態不明の形象埴輪 1・2、立飾り、形象埴輪基部
- 図版21 形象埴輪破片(1)、(2)
- 図版22 円筒埴輪 1、円筒埴輪 2、円筒埴輪口縁部破片
- 図版23 円筒埴輪胴部・突帯破片、円筒・形象埴輪底部破片
- 図版24 土器 IV-1、IV-2、IV-3、IV-4、V-2、V-3、V-4、VII-1、VII-2、VII-3
- 図版25 土器 VII-4、VII-5、VIII-1、VIII-2、VIII-3、VIII-4、VIII-5、VIII-6、VIII-7、VIII-8
- 図版26 土器 VIII-10、VIII-11、VIII-12、VIII-13、VIII-14、IX-1、一括-1、一括-2、一括-5
- 図版27 石製品、鉄製品、土製品、鉄滓・スケール、縄文土器

生産遺跡の研究 4

— 埴輪 —

はじめに

調査研究部長 高木博彦

財団法人千葉県文化財センターは、創立以来、埋蔵文化財の発掘調査とともにこれに係わる研究活動を主要な業務として積極的に対応してきた。個々の研究は日々、各々の調査現場、また報告書の作成等それぞれの場において常に行われているが、それとともに当文化財センターとして一定のテーマのもとに共同研究を行ってきた。この共同研究の成果は『千葉県文化財センター研究紀要』（以下研究紀要と略す）として逐次刊行され一定の評価を得ているものと自負するところである。研究紀要は文字どおり職員の研究成果を世に問うもので、昭和51年に第1号を刊行して以来今回で15号をかぞえる。この間、昭和61年3月に創立10周年記念号を記念論文集として刊行したのを除いて特定テーマによるシリーズとして刊行され、第Ⅰ期（第1号～第5号）は『考古学から見た房総文化の解明』という主題のもとに5冊にわたっていわゆる原始古代の房総文化の解明を試み、あるいはまたそのための資料の集成を行った。第Ⅱ期は『自然科学的手法による遺物・遺跡の研究』として自然科学的分析の考古学分野への応用に関する問題について研究しその成果を、昭和56年度（第6号）から昭和61年度（第11号）までの間に刊行した。

昭和62年度からは『生産遺跡の研究』をシリーズの統一テーマとして掲げ共同研究活動を実施してきている。『生産遺跡の研究』は瓦、玉、須恵器、埴輪の個別の主題について各々担当者を決めて調査研究にあたり、その成果はすでに『研究紀要』12号として「瓦編」、13号として「玉編」をそれぞれ刊行してきた。さらに平成5年度には、14号として「須恵器編」を上梓したところである。

埴輪については、平成3年度以来研究部（平成5年度からは調査研究部資料課）の兼務業務として、別に記す職員を中心に鋭意調査・研究を重ねてきたところであるが、今回その成果をまとめて研究紀要15号としてここに刊行するにいたった。

ここで改めて言及するまでもないが、埴輪は古墳の墳丘上にたてならべられる素焼きの造形物である。埴輪を今般のテーマである『生産遺跡の研究』という視点からとらえた場合、窯という特定の構造を有する施設が不可欠であること、またそれぞれの窯に特有の特徴が抽出でき、消費の場としての古墳から生産した窯の特定が可能なことなど生産と消費の関係をとらえるには格好の対象といえることができる。

千葉県において、現段階で確実にその存在が確認されている埴輪窯跡は、成田市公津原埴輪

窯跡（成田ニュータウンNo51-001号埴輪窯跡）と木更津市畑沢埴輪窯跡の2か所にすぎない。

今回、生産の場である埴輪窯出土資料をつぶさに検討し、各窯の製品である埴輪について考古学的観察と比較をつうじてその供給先について可能な限り追究を試みた。成田市公津原埴輪窯跡の埴輪は成田ニュータウンに現状保存されている千葉県指定史跡船塚古墳で採集された埴輪の破片と一致し、木更津市畑沢埴輪窯跡は県内最大の前方後円墳として知られる内裏塚古墳に埴輪を供給していたことが判明した。また、胎土分析の結果市原市山倉1号墳の埴輪が遠く埼玉県鴻巣市生田塚埴輪窯の埴輪と一致したのみならず埴輪の作風も極めて近似していることが改めて確認された。しかし、この結果のみで山倉1号墳の埴輪が埼玉県鴻巣市から供給されたと断定することは本文にもあるようにいささか性急に過ぎるかもしれない。粘土を伴った工人の移動の可能性が現段階では完全には否定できないからである。

千葉県においては現在、概算8～9千基の古墳が存在するとされているがこのうち埴輪をともなう古墳は大よそ一割弱程度とみこまれる。これに対して先に述べたように埴輪を焼いた窯は現在2遺跡を数えるのみである。本編で小見川町三之分目大塚山古墳の埴輪についていわゆる窖窯による焼成ではなく野焼きの可能性を示唆している。もしこれがひろく認められたとしても、ことは房総への埴輪の伝播のごく初期の現象に過ぎずそれ以後の埴輪の発達に対応する埴輪窯の存在は依然ときあかさされてはいない。近年のように県内各地で開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われているなかで上記の2遺跡というのは須恵器窯や瓦窯など他の窯業遺跡の発見数に比較しあまりにも少なすぎる。この事実がたんなる偶然に属するものなのか、あるいは、同じ窯業でも須恵器や瓦の生産とは全く別の要因が隠されているのかといった視点も含めて今後もながく研究を必要とする課題である。

埴輪窯跡の詳細な検討および出土資料の比較研究という考古学的手法に加えて、今回は胎土の分析比較という自然科学的手法にも注目し斯界の権威である奈良教育大学三辻利一教授に分析を依頼し、その成果についてレポートをいただいて本編を飾ることができた。

本編の刊行、それに先行する共同研究において、成田市公津原埴輪窯跡の資料について千葉県立房総風土記の丘、木更津市畑沢埴輪窯跡出土の資料については千葉県立上総博物館、安藤鴻基、杉山晋作の各氏から特段の便宜をいただいた。そのほか、今回の埴輪の研究にあたっては多くの関係機関および個々の方々のご指導とご協力をいただいた。次に機関名・ご芳名を掲げ各位のご協力について深く感謝の意を表するものである。

〈協力機関〉（順不同）

千葉県立房総風土記の丘、千葉県立上総博物館、芝山はにわ博物館、市原市文化財センター、流山市立博物館、野田市郷土博物館、我孫子市教育委員会、小見川町教育委員会、芝山町立古墳はにわ博物館、埼玉県杉戸町教育委員会、鴻巣市教育委員会、江南町教育委員会、群馬県太

田市教育委員会、群馬町教育委員会、茨城県勝田市教育委員会、茨城町教育委員会、奈良市埋蔵文化財調査センター、高槻市立埋蔵文化財調査センター

〈協力者〉（五十音別）

安藤鴻基、新井 端、飯塚博和、飯塚武司、井上裕一、石田守一、宇田敦司、小沢 洋、荻悦久、岡村眞文、鴨志田篤二、金山喜昭、車崎正彦、近藤 敏、白井久美子、白石真理、杉山晋作、須田 勉、高橋康男、中島和彦、濱名徳永、濱名徳順、平野 功、福間 元、松崎元樹、増田逸朗、宮田 毅、三辻利一、森田克行、山崎 武、米田耕之助、若狭 徹、若松良一

本編が県内外を問わず今後の埴輪とその生産についての研究にいささかなりとも裨益するところがあるとすれば幸いである。各位からのご指導とご鞭達を期待するとともに広く活用されることを願うものである。

本編の構成・編集、および平成3年度から今年度までの間の共同研究のとりまとめについては調査研究部資料課主任研究員（平成4年度までは研究部長補佐）渡辺智信がこれにあたった。本編の担当者、執筆分担は以下のとおりである。

〈担当者〉

平成3年度 深澤克友、萩原恭一、神野 信
平成4年度 深澤克友、萩原恭一、高梨俊夫、神野 信
平成5年度 深澤克友、萩原恭一、高梨俊夫、神野 信

〈執筆分担〉

深澤克友 1章
萩原恭一 2章-1、3、3章-1
高梨俊夫 2章-1、3章-2
神野 信 2章-1、2
三辻利一 2章-4

なお、木更津市畑沢埴輪窯跡出土の一括遺物のなかで、縄文土器については、高柳圭一氏の協力を得た。

1 章 序 論

1章 序論

1節 埴輪研究の現状と課題

1 はじめに

野見宿禰進曰、夫君王陵墓、埋立生人、是不良也。豈得傳後葉乎。願今將議便事而奏之。則遣使者、喚上出雲国之土部壹佰人、自領土部等、取埴以造作人、馬及種々物形、獻于天皇曰、自今以後、以是土物更易生人、樹於陵墓、為後葉之法則。天皇於是、大喜之、詔野見宿禰曰、汝之便議、寔洽朕心。則其土物、始立于日葉酢媛命之墓。仍號是土物謂埴輪。、『日本書紀』垂仁天皇三二年)

今日用いられている「埴輪」の用語の元となったことだけでなく、「埴輪」起源について初めて言及されていることで、あまりにも著名な文献史料である。無論、現代考古学において、遺物の名称に『日本書紀』編纂時のそれを必ずしも十分検証することなく、そのまま用いることに対して、まったく抵抗がないわけではない。実際、都出比呂志は「埴輪」に代わる「古墳祭祀土製品」等の用語の規定の必要性を提唱している(都出1989)。この問題についても決して軽視する訳には行かないと考えるが、残念ながらここでこの議論にまで踏み込む余裕はない。よって、今回は敢えて学史的「伝統」を引き継いで、「埴輪」という用語を用いることとしたい。

2 埴輪研究史

埴輪研究の過程については、既に詳細かつ適切にまとめられた著述がいくつかあるので(橋本1988他)、ここでは個々の研究成果について具体的にとりあげず、概観するだけに止める。

先にあげた『日本書紀』の記述以降、積極的に埴輪に関心が向けられ、記録に見られるようになるのは江戸時代からであり、偶然発見された円筒・人物埴輪や墳丘に並べられた埴輪の配置図等の絵図も残されている。そしてこの時点で既に『日本書紀』の殉死代用品としての「埴輪」と結び付けられ始めている。

埴輪研究が本格的になされ始めるのは、近代に入りハインリッヒ・フォン・シーボルトやウィリアム・ゴーランド等の欧米人を中心に積極的にとりあげられるようになってからである。この中で、殉死代用説以外に墳丘保護のための土留め説が出され、これを受けるような形で日本人研究者による研究も本格化する。1888年に坪井正五郎が円筒埴輪「柴垣模倣」説(坪井1888)、さらにその後「土留め・玉垣変形説」を提唱したのに対し(坪井1901)、和田千吉が土留め説を否定した「墳丘装飾説」(和田1897他)、光井清三郎の「柴垣模倣説」批判等(光井1902)が続出した。しかし、その後、第2次世界大戦前まで高橋健自・後藤守一・喜田貞吉等と続く埴輪研

究の中心は、もっぱら形象埴輪に向けられ、その起源と機能が論じられるようになり、他方、円筒埴輪の研究となると柴田常恵・内藤政光によるものが散見される程度となる。

この埴輪研究の流れに新たな段階を迎えるのは、第2次世界大戦後である。その契機となったのは、奈良県茶臼山古墳の発掘調査からであろう。1949年、末永雅雄・上田宏範による茶臼山古墳調査の結果、後円部墳頂部の竪穴式石室を方形に囲うように底部穿孔の壺形土器配列が検出され、埴輪畿内発生説の拠り所となった。さらに、底部を土器焼成前に穿孔した壺形土器をとらえて、埴輪が実用品から仮器に転化したものと解釈し、円筒埴輪の起源を認定している(末永1951他)。これを受けるかたちで円筒埴輪を中心に埴輪起源が論じられるようになるが、この流れを軌道にのせたのは、吉備地域における弥生時代墳墓の調査研究の進展である。岡山県岡山市都月1号墳・児島市向木見遺跡・総社市宮山墳墓群と続く発掘調査により、円筒埴輪の起源が吉備地域の特殊器台形土器・特殊壺形土器に求められるという新たな見解が形成されてきた。これは、近藤義郎・春成秀爾によって「埴輪の起源」としてまとめられ(近藤・春成 1967)、次いで都出比呂志により器面調整技法から円筒埴輪を3期に分類する編年案が提示され、ようやく埴輪の編年研究が着目されるようになった。

1960年から1970年代にかけて、各地域での埴輪編年試案が示されるとともに、埴輪生産遺跡の発掘調査等も加わり、埴輪生産の復原、工人集団の活動についても研究の目が向けられるようになり、埴輪研究の方向性が確立された時期であった。その中でも「円筒埴輪総論」において川西宏幸が提唱した円筒埴輪5期細分(I~V期)の編年案は、その後の埴輪研究を進める上で大きな役割をはたした(川西1978)。とりわけ円筒埴輪について、その成形・整形・焼成技法を詳細に分析した研究はそれまでになく、また古墳の規模と副葬品等の共伴遺物を緻密に分析することにより、各地域間の動態をも考察した全国的な視野に立った論考であった。

円筒埴輪の研究は、川西編年の提示以後、これを基礎として各地域での編年研究が展開されるようになり、1970年代からは資料の増加とあいまって、この川西編年と対比し、検証するような形で全国的に研究が進められている。この動きの中では、大筋において川西編年が追認されているようであるが、その問題点もまた明らかにされつつあり、今後の新たな研究の展開が予想される。しかし、これ以上に円筒埴輪が単に編年の研究の対象だけでなく、その系譜と生産体制・受給関係等に政治的背景を読みとるうえで有効であることが明らかにされたことも重要な成果であり、その結果、円筒埴輪が今日にいたる埴輪研究全体の中で主要な位置を占めるようになったといえよう。

3 埴輪研究の現状

埴輪の起源については、古墳の発生とその拡散過程の解明と密接に結びついた問題となっている。埴輪の成立期については、吉備地域の弥生時代墳墓の供献土器の特殊器台形土器・壺形土器から転化したものであるという解釈において、いわゆる都月型特殊器台形土器が実用性を

失った仮器と判断されるに至って円筒埴輪の成立とされている。しかし、その一方で最古式の古墳の一つである奈良県箸墓古墳では、特殊器台型埴輪・特殊壺形埴輪等が採取されているほか、畿内においても都月型特殊器台形埴輪等が確認され、果たして吉備地域にその系譜を求められるのかについても現在疑問が投げかけられている(白石他1989)。また、円筒埴輪より後出するとされたいわゆる朝顔形埴輪についても、単に壺形土器と円筒埴輪が合体したという一元的なものではなく、吉備地域と畿内とが複雑に錯綜する基盤から発生した可能性も指摘され、統一的な理解にはいたっていない。しかし、現在では一応、吉備地域に発生した特殊土器類が畿内に受容され、大型前方後円墳が形成されていく過程で円筒埴輪として変容されていくという流れとして理解されているのが、大勢であろう。

古墳の編年の研究は古墳研究の基礎を担う部分であるが、古墳の構造(墳丘形態・埋葬形態)や副葬品等による方法に加えて、埴輪もまた有効な材料となり得ることが明らかにされて以来、埴輪の編年研究が飛躍的に進展している。その円筒埴輪の編年研究について先鞭をつけたのは、既に述べたように器面調整技法から3期に分類した都出比呂志である(都出1979)。それ以降、春成秀爾・川西宏幸・赤塚次郎等が相次いで編年試案を発表し、概ねこれらが今日の編年研究の指標となっている。これらの編年によれば、3世紀中葉から6世紀末にかけて、各期を小区分するのを除けば3期(赤塚編年)ないし5期(春成編年・川西編年)に細分されている。ただし、春成編年と川西編年との最も大きな相違は、春成編年では都月型を第Ⅰ期としているのに対し、川西編年ではこの段階を朝顔形埴輪・形象埴輪の未成熟な段階にあるものとして認識しているため、両者に相当な年代の開きが生じている。

川西編年は、円筒埴輪の内外面の調整技法、突帯の形状、最下段の技法、透孔の形状、黒斑の有無等、成形から焼成に至るまで詳細に観察し、分析したものである。この中で特に外面調整技法に着目し、これをA種(断続的な)ヨコハケ・B種(断続的な)ヨコハケ・C種(連続的な)ヨコハケ・タテハケに分類し、編年の基準としている。そして、黒斑の有無により須恵器生産という新技術の影響を受けたと考えられる窖窯焼成の導入段階に画期を認め、両者を併せてⅠ～Ⅴ期に区分している。さらに、この編年に基づいて全国的に検討を加えた結果、第Ⅰ期～Ⅲ期までは畿内の製作技法が各地に伝播する段階、第Ⅳ期以降は地域色の確立段階と捉えている。川西編年は、その明快な編年基準と全国的な視点に立った検証から、以後の埴輪研究の指標として広く受け入れられていく。

川西編年が提唱されて以後、全国各地で編年研究が活発化するが、その主眼は川西編年の流れに沿って円筒埴輪の持つ普遍的特徴と地域色の抽出に置かれるようになる。さらに、埴輪生産遺跡の発掘調査例が増えた今日、これらの成果も加わり、B種ヨコハケの出現と消滅時期、窖窯導入の時期差による地域色の違い等、新たな知見が得られてきており、各地域における編年作業の見直しが進められつつある状況となってきたといえよう。

例えば、関東地方では飯塚武司が北武蔵地域での埴輪生産の展開過程について言及し、窯跡や古墳から出土した円筒埴輪を中心にして、古墳主体部の形態や副葬品の組み合わせ、伴出土器等によって導き出された実年代を通して、川西編年第Ⅲ期からⅣ期を3段階に区分している(飯塚1982)。これによれば、埴輪生産への窖窯導入と埴輪の大量生産体制の確立という2つの画期を設定することにより、黒斑を有する野焼き段階を第Ⅰ期(5世紀前半)、窖窯導入段階を第Ⅱ期(5世紀中葉～末葉)、埴輪の大量需要と、それに伴う技法の統一化により大量生産される段階を第Ⅲ期(6世紀代)としている。また、第Ⅲ期については、窯跡の編年を元にさらに5段階に細分しているが、この段階については他に2期分する解釈や4期分する見解などもあり、確立しているとはいえない。さらに外面2次調整のB種ヨコハケが出現する第Ⅰ期と第Ⅱ期については、それぞれ川西編年でいう第Ⅲ期・第Ⅳ期に比定されると考えられるが、須恵器生産の開始に伴って取り入れられたと考えられる叩き技法を有する円筒埴輪の位置づけやそれらの埴輪を製作した工人集団の系譜などについては未解決の部分も多く残されている。

また、九州地方の円筒埴輪の編年研究においても、大西智和によって円筒埴輪はその導入期から衰退期まで一貫して畿内と並行した変化過程をたどるものの、欠落する要素(外面二次調整ヨコハケや底部調整等)があることが注目されている。つまり、九州地方の円筒埴輪は、基本的には畿内における川西編年の流れと大きな相違は認められないが、畿内に見られる技法をそのまま受容していないという事実を指摘した。そして、大西はこの欠落こそがその地域の特色であり、「畿内の埴輪との類似度＝畿内の地方への影響力の強弱」であると解釈している(大西1993)。

このように川西編年を検証する形で各地域の埴輪編年案が出されると同時に、川西編年に反証するような新たな問題点も多く浮かび上がってきた。この川西編年の問題点については、早くからこれが中型円筒埴輪にのみ当てはまるものであり、装飾性に富む大型円筒埴輪や逆に小型の円筒埴輪には合致しない、あるいは同一古墳に複数の技法を持った埴輪があることや、古い技法の残存に対する解釈が困難である、といった指摘がなされてきた。この中で、特にB種ヨコハケの評価については、近年注目される成果があげられつつある。その一例として関東地方の研究動向をとりあげると、右島和夫によって5世紀第3四半期にB種ヨコハケが認められるものの、横穴式石室が出現する以前に消滅しており、5世紀後葉には既に一部残存する程度であったと指摘されている(右島1989)。また、坂本和俊は、埼玉県域の埴輪を4期に分け、B種ヨコハケの出現を5世紀中葉に求めているが、5世紀第3四半期には消滅が始まり、その消滅時期をTK208からTK23期の間と捉えている(坂本1985)。一方、石塚久則は、5世紀第2四半期はB種ヨコハケの定着期であり、5世紀第3四半期には大型古墳の消滅と共にB種ヨコハケの粗雑化が認められると指摘している(石塚1990)。

つまり、関東地方では2次調整B種ヨコハケの出現については、5世紀第2～第3四半期頃と考えられているが、円筒埴輪におけるB種ヨコハケの省略・粗雑化は、従来考えられていた

よりも一部地域では早くから始まっていたのではないか、という問題提起がなされてきつつある。その結果、B種ヨコハケの有無をもって古墳の新旧を決定する要素として捉えられていたが、同時期であっても古墳によってはこの技法を持つものと持たないものが存在する可能性が高まりつつあることから、必ずしもこれをもって新旧の決定的要素となり得ないのではないかという疑問が生じつつある。これについては、B種ヨコハケが単一な調整技法ではなく、B種ヨコハケの中でさらに細分化することができ、その結果、技法の簡略化が時間差となって現れてくるといふ指摘もあり、その過程には大規模古墳の消滅と群集墳の成立、それに連動しているであろう埴輪工人集団編成の変動が密接に関連しているのではないかという意見も出されている。

このように現段階では、埴輪研究はまだ川西編年を中心にその「検証」といった色彩の強い流れを見せているといえるが、今後は地域における編年研究のよりいっそうの深化によって、川西編年の問題点を更に明確化させ、その問題点を積極的に評価していくことが重要となっていくであろう。また、埴輪生産遺跡と供給先の古墳との有機的なつながりを辿り得る資料が徐々にではあるが得られつつあり、これによって埴輪研究が古墳時代の政治的・経済的そして社会的側面に迫るうできわめて重要な位置を占めていることが再確認されている。そして、このことは、とりまなおさず(埴輪を持つ、持たないを含めて)「古墳とはなにか」という問題と常に密接に関わっており、この視点に立って古墳の形態・規模、埋葬形態・副葬品等を含めた総合的な研究が求められていくこととなる。

2節 房総における埴輪研究

千葉県における埴輪研究は、その早い段階からの古墳調査の成果の蓄積とともに歩んできたといえよう。千葉県には、これまで8,000基を越える古墳が知られ、この中で埴輪の伴う古墳は200基以上確認されている。

千葉県における初期の埴輪に関する記録としては、1891年に偶然発見された木更津市祇園大塚山古墳の出土遺物があるが、その後、1906年には柴田常恵が富津市内裏塚古墳を6日間にわたって発掘し、2基の竪穴式石室から鏡、鉄刀、鉄鏃等の副葬品の他、埴輪を発見している。また、1911年には坪井正五郎・柴田常恵らが富津市九条塚古墳を調査しているほか、その翌年には我孫子市子の神古墳群の一部(円墳)を土取り工事の際に立ち会い、墳丘裾に埴輪列が巡っていることを確認している。また、房総西線(現在の内房線)敷設工事により木更津市高柳銚子塚古墳の前方部が破壊され、円筒埴輪が発見されている。この段階の調査はまだきわめて限定されたものであったり、不慮の事態下でのものであったが、県内最大の前方後円墳・内裏塚古墳をはじめとし、旧上総国に位置する主要古墳の調査が多かったことは注目される。

古墳の調査が本格的に開始されるのは第2次世界大戦後からであり、これは全国的な動向と

軌を一にする。ただし、この時期の調査は、今日の開発を前提としたいいわゆる「行政発掘」と異なり、学術調査が主体であり、大学研究室や研究者によって積極的に県内各地の古墳が発掘されている。その端緒となる調査は、内裏塚古墳に次ぐ規模を持つ前方後円墳・市原市二子塚古墳(大場磐雄・亀井正道 國學院大學)と長南町能満寺古墳(大塚初重 明治大学)であり、このうち二子塚古墳からは円筒埴輪が出土したものの、当時は副葬品の方がもっぱら注目されていたようである。

埴輪が墳丘に列をなして樹立されていた調査例として注目された初現のものは、松尾町朝日の岡古墳と成東町西ノ台古墳であろう。いずれも成東町不動塚古墳の調査を契機として軽部慈恩を中心とする日本大学考古学会が精力的に九十九里地域の前方後円墳を調査した際にその対象となった古墳で、朝日の岡古墳では3列(軽部1957)、西ノ台古墳では墳丘裾に2列、墳頂部に2列、「壇上部」に2列の埴輪列があったとされているが(軽部1958)、残念ながら本報告が出されていないので、詳細については不明である。

1960年代もこの傾向が続き、その代表的なものが滝口宏を中心とする早稲田大学による横芝町殿塚・姫塚古墳の調査であろう。殿塚古墳は全長約88mの前方後円墳で、二重周溝を持ち、後円部の横穴式石室から頭椎大刀・直刀・金銅製品・銅鏡等が出土したほか、墳丘中段・下段と内堤に円筒埴輪・形象埴輪列が発見されている。姫塚古墳は殿塚古墳よりやや規模の小さい前方後円墳で、同様に後円部中段に円筒埴輪と形象埴輪による埴輪列が発見されている。これらの古墳が学史的に評価されるのは、埴輪の量もさることながら、その出土状況から被葬者あるいは古墳の性格と関わる祭祀のあり方を復原することができるかと判断されていることにある。そしてこの調査成果から「葬列再現説」が出され(滝口他1963)、さらにその後「モガリ説」・「首長継承儀礼再現説」・「顕彰碑説」等も提示される等、埴輪研究の一つの方向性を決定したといえよう。

これに続く形で我孫子市高野山1～4号墳・金塚古墳、千葉市中原古墳群、芝山町宝馬にわとり塚古墳、流山市東深井古墳群、小見川町城山1号墳、市原市西広モチ塚古墳等、埴輪を伴う古墳の調査例が増加する。中でも城山1号墳は、6世紀後半の利根川下流域を代表する墳丘68mの前方後円墳であるが、切石積み横穴式石室からは鏡や武器・武具、馬具、玉類等の多種多様な副葬品が出土したほか、墳丘中段に円筒埴輪列、前方部からくびれ部と後円部の一部に形象埴輪列が確認され、注目された。

1970年代に入ると開発に伴う行政発掘が増加し始め、それに伴って埴輪を持つ古墳の調査例も飛躍的に増える。その中で埴輪列が確認された代表的なものだけでも、小見川町城山5号墳、芝山町殿部田1号墳・木戸前1号墳、一宮町待山1号墳、流山市東深井古墳群、市原市山倉1号墳、木更津市清見台古墳群、成田市公津原古墳群、市川市法皇塚古墳、成東町経僧塚古墳、神崎町舟塚原古墳・武田古墳群、君津市馬門古墳、印西町小林1号墳、佐原市片野古墳群など

があげられ、今日の埴輪研究の基礎的な資料はこの段階でほぼ出そろった感がある。また、この時期に成田市公津原と木更津市畑沢で埴輪窯跡が発見されていることも特筆される他、また、山倉1号墳では円筒埴輪・形象埴輪とも「武蔵型」で、埼玉県鴻巣市生出塚埴輪生産遺跡の製品ときわめてよく似ていることから、同一工人集団の手によるものの可能性が指摘されるなど(米田1976)、埴輪生産・流通のあり方が問題となっている。

なお、この段階で房総における円筒埴輪について画期的な論考『埴輪研究』第1冊が轟俊二郎によって発表されている(轟1973)。轟は、印旛・手賀地域の円筒埴輪を詳細に分析し、「下総型埴輪」の存在を明らかにしたほか、その埴輪生産工人集団のあり方にも論及している点で円筒埴輪の先駆的研究といえる。このほか、形象埴輪については、杉山晋作が芝山はにわ博物館が中心となって調査した古墳出土の人物埴輪を身体各部の表現方法から検討し、一集団によるものと考え、2タイプに分け、それらが新旧関係にあるとしている(杉山1976)。また、市毛勲は木戸前1号墳・経僧塚古墳・殿部田1号墳等から出土した人物埴輪をもとに顔面の彩色技法や眼・口の様式について論じている(市毛1976)。

1980年代になると、埴輪を持つ古墳の調査例自体はそれほど大きく増加してはいないが、下総町木挽崎古墳群、千葉市人形塚1号墳、印旛村山王古墳、丸山町永野台古墳、山武町森台古墳群、小見川町三之分目大塚山古墳、成田市竜角寺101号墳等、埴輪研究において新たな問題を提起するような重要な資料が得られている。この中で、三之分目大塚山古墳では墳頂部・中段テラス・下段テラスの3段を巡る円筒埴輪列が確認され、その円筒埴輪は野焼きによる黒斑を持つことから川西編年Ⅲ期に相当する房総の最古段階のもので、茨城県水戸市愛宕山古墳・石岡市舟塚山古墳・常澄村金山塚古墳出土の埴輪との共通性が認められることから、注目される資料である(萩原他1987)。

なお、このころから埴輪についての論考が多く出されるようになる。1980年には『上総殿部田・宝馬古墳』における埴輪の検討の中で先にあげた轟の成果の検証を試みている(浜名他1980)。また、安藤鴻基は、房総における埴輪出土古墳を集成したうえで、その初源期から展開期、盛行期を経て消滅するまでをとりあげ、初期の埴輪は大型前方後円墳に受容されるものであり、従って鶴塚古墳のものについては埴輪ではなく「器台形土器」とするなど、いくつかの問題を提起し(安藤1982)、さらに1983年には共著の形であるがこれを補充している(神山他1983)。これ以外には千葉県文化財センター『研究紀要』8において、土器胎土分析の基礎的研究の一環として千葉県出土の埴輪の胎土分析が行われ、数量自体は多くなかったものの畑沢埴輪窯の製品と内裏塚古墳・高柳銚子塚古墳の埴輪の特徴が共通するという、房総における埴輪生産と流通を検討するうえで看過できない成果が得られている。

このほか、千葉県内の埴輪の様相を概観したものとして、萩原恭一が『埴輪の変遷』をテーマとする埼玉・群馬・長野三県シンポジウム(群馬考古談話会他主催)において「千葉県にお

ける埴輪の様相と展開」と題して報告し、その中でB種ヨコハケや三之分目大塚山古墳の評価から房総における埴輪受容のあり方や、「下総型埴輪」と東京湾岸を中心とする埴輪の差異とその系譜について問題を提起している(萩原1985)。

近年の成果としては、1984～1986年に行われた竜角寺101号墳の調査があげられる。この古墳は、造り出し付き円墳で、墳丘裾に円筒埴輪列が巡り、造り出し部に人物・武人・動物埴輪が樹立されており、竜角寺古墳群の中で唯一完全に埴輪列が調査されたものである。この中で特に形象埴輪群の配置方法の系譜や畿内と明らかに異なる「盾持ち人」に見られる技法、猪・犬・鹿の脚を前後2本の円筒で表現するいわゆる「常総脚」等、当該地域における埴輪の展開を考えるうえで興味深い資料が得られている(安藤他1988)。

円筒埴輪については、宇佐見義春が積極的に集成及びその編年的位置付けを試みている(宇佐見1987)。このほか、小澤洋が君津市狐山古墳発掘調査の報告の中で低位突帯について論及し、小糸川流域における埴輪の編年観を示している。それによるとB種ヨコハケを伴わない川西編年IV期に比定される内裏塚古墳の埴輪を古式とし、次いでコ字形突帯を持つ武平塚南方古墳を5世紀後葉、馬門古墳も5世紀代に収まると位置づけ、これに続くものが川代4号墳、九条塚古墳、稲荷山古墳、狐山古墳としている。そして、きわめて特徴的な最下段の幅が狭い円筒埴輪が上総・安房地域において拠点的に見いだせることを指摘し、先の編年観から下総型埴輪の特徴である低位位置突帯が盛行する6世紀後半より遡って出現するものと考えている(小澤1989)。

以上、房総における埴輪研究について概観してきたが、関東の中でも他県では円筒埴輪の編年研究が地域毎に進められ、新たな成果が出されつつあるように見受けられる。しかしながら、千葉県埴輪については資料的には他県に劣らぬほど蓄積がなされているものの、その内容の具体的な検討については、残念ながら必ずしも進んでいるとはいえない状況にある。房総における初源期の埴輪の問題(埴輪の受容と展開の過程)・埴輪の地域相の抽出とその系譜の追求等の問題がまだ山積している。これらの問題を考えるに当たり、基本的な資料として埴輪生産体制と流通等の具体的なあり方を解明する作業が重要となっている。幸いなことに、この点については先学によって早くから注意が向けられ、ひとつの方向性が示されてきた流れがある。ただし、残念なことに肝心の埴輪生産遺跡の調査例となると、今日に至るまで1970年代に調査された木更津市畑沢埴輪窯跡と成田市公津原埴輪窯跡の2遺跡しかなく、資料的にかなり限定されており、逆に房総における埴輪研究を制約する形になっているといえよう。県内至る所で発掘調査が行われているのにも関わらず、このような埴輪生産遺跡の調査例の少なさは、埴輪を持つ古墳の数に比べて特異とも感じられるが、これが房総における埴輪生産体制の特徴を反映しているものなのか、あるいは単に今までの調査の網に掛かっていないだけなのかについては、現段階では何ともいえない状況にある。今後の課題として、埴輪生産遺跡の台地斜面部を含めた広範囲にわたる確認調査が望まれる。

1章 序 論

そこで、今回の『研究紀要』15では、今後の埴輪生産と流通を検討するうえでの基礎資料とするべく、千葉県内で調査された2か所の埴輪生産遺跡の再整理と資料の提示を行うこととした。また、これとともに県内出土埴輪の胎土分析を実施し、併せて生産と流通のあり方を知る手がかりを得るよう試みたが、ここでは従来より「巡回生産」か「拠点生産」かどうかで、その生産体制が議論されてきた「下総型埴輪」を中心にとりあげることにした。以上のことを通して、本研究紀要によって今後増えるであろう資料や埴輪研究のための比較検討材料を提供できれば幸いであると考えている。

〈引用・参考文献〉

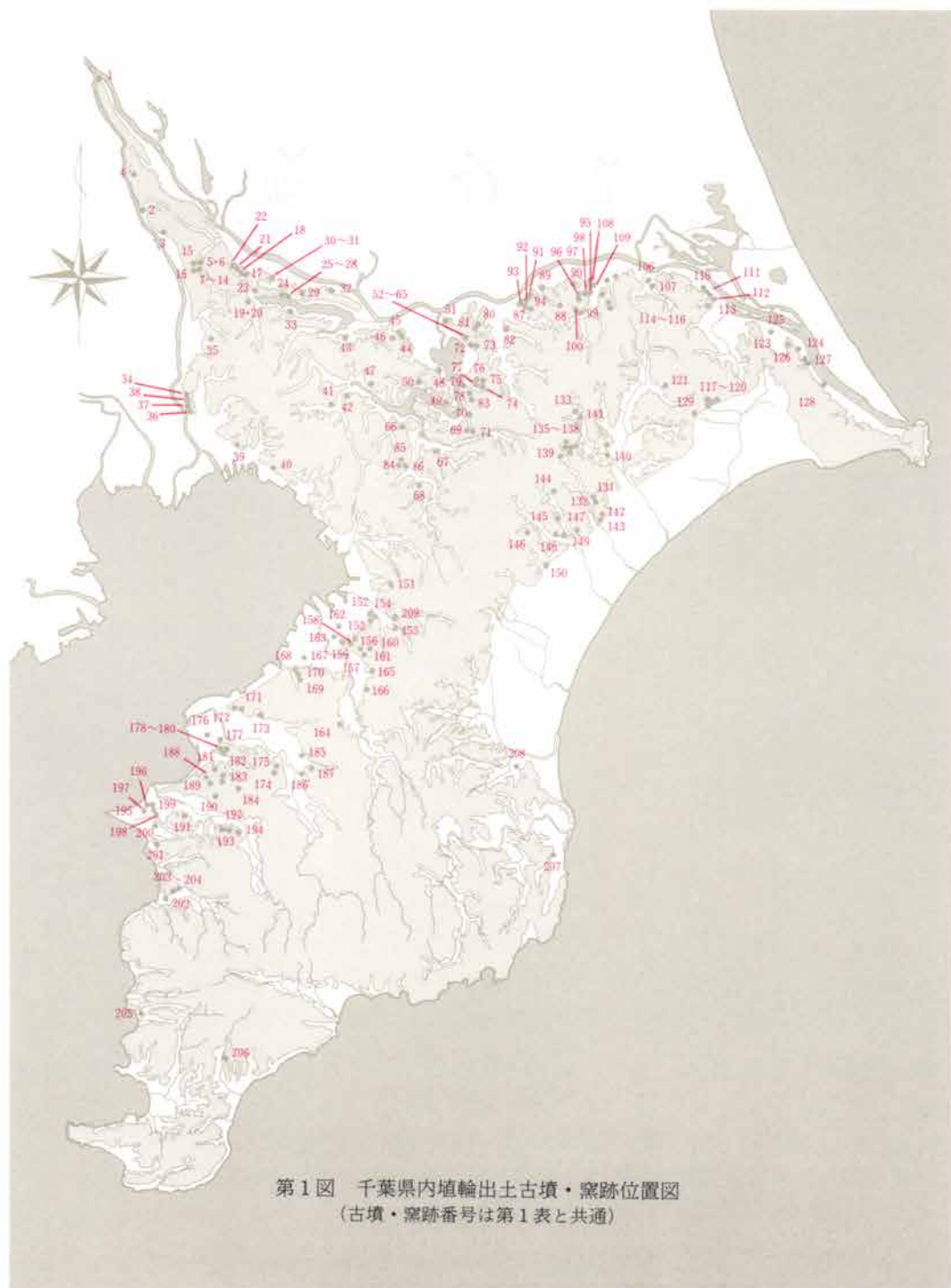
- 安藤鴻基他 1982 『山田宝馬古墳群』山田古墳群遺跡調査会
- 安藤鴻基他 1988 『千葉県成田市所在龍角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会
- 飯塚 武司 1984 「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古』9 法政考古学会
- 市毛 勲 1976 「房総人物埴輪顔面赤彩色法」『古代』59・60 早稲田大学考古学研究会
- 宇佐見義春 1987 「千葉県の円筒埴輪」『日本考古学研究所集報』IX 日本考古学研究所
- 大西 智和 1993 「地域性の発現からみた円筒埴輪の導入と展開の再解釈」『九州考古学』68
- 小澤 洋 1989 『千葉県君津市内遺跡群発掘調査報告書』君津市教育委員会
- 軽部 慈恩 1957 「千葉県山武郡朝日ノ岡古墳」『日本考古学年報』5 日本考古学会
- 軽部 慈恩 1958 「千葉県山武郡西ノ台古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学会
- 川西 宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会
- 神山崇・安藤鴻基・原田昌幸 1983 「房総の埴輪について」『房総風土記の丘年報』6 千葉県立房総風土記の丘資料館
- 近藤義郎・春成秀爾 1967 「埴輪の起源」『考古学研究』13-3 考古学研究会
- 坂本 和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪の編年の諸問題」『埴輪の変遷—普遍性と地域性』(三県シンポジウム) 北武蔵古代文化研究会他
- 白井久美子 1987 「祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器」『古代』83 早稲田大学考古学研究会
- 白石太一郎他1989 「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』3(第一法規出版)
- 末永 雅雄 1951 「上代土器技術と生産転換」『考古学論攷』第1冊
- 杉山 晋作 1976 「房総の埴輪(一)九十九里地域における人物埴輪の二相」『古代』59・60早稲田大学考古学研究会
- 杉山晋作他 1979 『研究紀要』4 (財)千葉県文化財センター
- 滝口 宏他 1963 『はにわ』(日本経済新聞社)
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3 考古学研究会

- 都出比呂志 1999 「土器研究と古墳研究の現状」『古墳時代前半期の土器研究とその社会』（第25回埋蔵文化財研究集会講演記録）埋蔵文化財研究会
- 坪井正五郎 1888 「埴輪土偶に基いて古代の風俗を演ぶ」『東京人類学会雑誌』3-23 東京人類学会
- 坪井正五郎 1901 『はにわ考』（東洋社）
- 轟 俊二郎 1973 『埴輪研究』1
- 萩原 恭一 1985 「千葉県における埴輪の様相と展開」『埴輪の変遷—普遍性と地域性』（三県シンポジウム）北武蔵古代文化研究会他
- 橋本 博文 1988 「埴輪の性格と起源論」『論争・学説日本の考古学』5（有山閣出版）
- 浜名徳永他 1980 『上総殿部田・宝馬古墳』芝山はにわ博物館
- 平野功・萩原恭一 1987 『三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』小見川町教育委員会
- 右島 和夫 1989 「東国における埴輪樹立の展開とその消滅—上野地域の事例を中心に」『古文化談叢』20
- 光井清三郎 1902 「埴輪円筒は果たして柴垣に象れるものか」『考古界』2-7
- 米田耕之助 1976 「上総山倉1号墳の人物埴輪」『古代』59・60 早稲田大学考古学研究会
- 和田 千吉 1897 「播磨国飾磨郡白国村人見塚調査報告」『人類学雑誌』12-132・134
- 和田 千吉 1902 「古墳に於ける埴輪土偶埋没の位置」『考古界』1-9
- 和田 千吉 1902 「埴輪円筒は果たして土留なるか」『考古界』2-2

2 章 各 論

2章 各論

1節 房総における埴輪出土遺跡



第 1 表 千葉県内埴輪出土古墳・窯跡・遺跡一覧

番号	古墳名 又は 窯跡名 遺跡名	所在地	墳形(規模)	埴輪						埋葬施設	副葬品	時期	文献
				円筒					形象				
				条・段	二次調整	透孔	突帯	底部調整	種類				
1	関宿城	東葛飾郡関宿町久世曲輪	不明	3・4		○	台形	なし			V(下総型)	1	
2	岩名古墳	野田市岩名	不明									2	
3	角倉古墳	野田市						人物?				2	
4	香取原1号墳	野田市川間	不明	3・4		○	台形					3	
5	初石1号墳	流山市初石	円(16m)									4	
6	初石2号墳	流山市初石	円(不明)									4	
7	東深井1号墳	流山市東深井	円(22m)								V	5	
8	東深井3号墳	流山市東深井	円(13m)					駱			V	6	
9	東深井5号墳	流山市東深井	円(23m)								V	6	
10	東深井7号墳	流山市東深井	円(14m)	3・4		○	台形				V	7	
11	東深井9号墳	流山市東深井	前方後円(21m)	2・3				人物・馬、盾持			V(武蔵型)	8	
12	東深井11号墳	流山市東深井	円(16m)								V	5	
13	東深井12号墳	流山市東深井	円(16m)								V	8	
14	東深井2号周溝	流山市東深井	不明	2・3		○・○	台形				V(武蔵型)	5	
15	一ノ台古墳	流山市東深井	円(不明)									2	
16	中野久木古墳	流山市中野久木	円(16m)						木棺直葬			2	
17	花野井大塚古墳	柏市花野井	円(20m)	3・4		○	台形		粘土槨	短甲・胡篋他	V	9	
18	香取神社境内	柏市花野井	不明									2	
19	天神台2号墳	柏市柏	円(15m)	3・4		○	台形				V	10	
20	天神台3号墳	柏市柏	円(10m)									2	
21	きつね山古墳	柏市大室	前方後円(20m)									2	
22	城ノ越古墳	柏市大室										2	
23	金塚古墳	我孫子市根戸	円(20m)	3・4		○	台形	水鳥	木棺直葬	小型仿製鏡、短甲	V	11	
24	子の神7号墳	我孫子市寿	円(18m)	3・4		○					V	12	
25	高野山1号墳	我孫子市我孫子	前方後円(36m)	3・4		○	三角	人物・器財・動物			V	11	
26	高野山2号墳	我孫子市我孫子	前方後円(20m)	3・4		○	三角		箱式石棺		V	11	
27	高野山3号墳	我孫子市我孫子	円(17m)	3・4		○	三角		横穴式石室		V	11	
28	高野山4号墳	我孫子市我孫子	前方後円(27m)	3・4		○	三角	人物	箱式石棺		V(下総型)	11	
29	岡発戸5号墳	我孫子市下ッ戸東	円?(不明)									2	
30	久寺家1号墳	我孫子市久寺家	円(不明)	3・4		○	台形				V	11	
31	久寺家2号墳	我孫子市久寺家	円(不明)	3・4		○	台形					11	
32	高根古墳	我孫子市中峠	円(15m)									2	
33	北ノ内2号墳	東葛飾郡沼南町鷺野	円(10m)						箱式石棺(?)	直刀		2	
34	栗山1号墳	松戸市栗山	円(13m)					人物、馬		直刀(?)		13	
35	小金1号墳	松戸市小金	円(30m)	3・4		○	台形				V	13	
36	法皇塚古墳	市川市国府台	前方後円(65m?)					人物・家	横穴式石室	直刀・甲冑他	V	14	
37	明戸古墳	市川市国府台	前方後円(40m?)						箱式石棺			2	
38	丸山古墳	市川市国府台	円(不明)									2	
39	竹ノ越古墳	船橋市海神	不明			○	台形	人物				15	
40	鷺沼A号墳	習志野市鷺沼	前方後円(30m?)	3・4		○	台形		竪穴式石室?		V	16	
41	桑納2号墳	八千代市桑納	前方後円(34m)	3・4		○	台形	人物、馬			V	17	

2章 各論

番号	古墳名 又は 竪跡名 遺跡名	所在地	墳形(規模)	墳輪					埋葬施設	副葬品	時期	文献	
				円筒				形象 種類					
				条・段	二次 調整	透孔	突帯 底部 調整						
42	神野芝山4号墳	八千代市神野	円(40m?)							粘土塚?	石枕他		2
43	松山1号墳	印旛郡印西町浦部	円(22m)							木棺直葬	直刀、刀子		2
44	小林1号墳	印旛郡印西町小林	円(18.5m)	3・4		○	台形	馬、人物	木棺直葬	直刀、管玉、瓊玉	V	18	
45	小林城跡	印旛郡印西町小林	不明	3・4?		○	台形	人物			V	19	
46	道作15号墳	印旛郡印西町小林	前方後円 (45m)										2
47	西ノ原1号墳	印旛郡印旛村吉田	前方後円 (40m)	3・4		○	三角					V(下総型)	20
48	吉高山王古墳	印旛郡印旛村吉高	前方後円 (25.4m)	3・4		○	三角	人物	箱式石棺	刀子、耳環	V(下総型)	21	
49	油作2号墳	印旛郡印旛村平賀	前方後円 (40m)	3・4		○	三角	馬、人物			V(下総型)	22	
50	大木台2号墳	印旛郡印旛村瀬戸	円(17m)	3・4		○	三角	人物、馬	木棺直葬	直刀、鉄鏃	V(下総型)	23	
51	武者塚古墳	印旛郡栄町安食	円(24m)										2
52	竜角寺4号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (32.5m)										24
53	竜角寺9号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (39m)				台形						24
54	竜角寺10号墳	印旛郡栄町竜角寺	円(13m)				台形	人物					24
55	竜角寺16号墳	印旛郡栄町竜角寺	円(17m)				台形						24
56	竜角寺17号墳	印旛郡栄町竜角寺	円(18m)				三角						24
57	竜角寺19号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (38m)										24
58	竜角寺28号墳	印旛郡栄町竜角寺	円(25m)					人物					24
59	竜角寺37号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (31m)	3・4		○	三角					V(下総型)	24
60	竜角寺42号墳	印旛郡栄町竜角寺	円(22m)				台形						24
61	竜角寺44号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (19m)										24
62	竜角寺57号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (48m)						箱式石棺				24
63	竜角寺68号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (30m)										24
64	竜角寺70号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (43m)										24
65	竜角寺112号墳	印旛郡栄町竜角寺	前方後円 (35m)	3・4?		○					V		24
66	臼井小笹台1号墳	佐倉市臼井	前方後円 (29m)										2
67	石川古墳	佐倉市六崎	不明(20m)										2
68	姫宮古墳	佐倉市馬渡	前方後円 (23m)	3・4		○	台形	人物	箱式石棺				25
69	将門2号墳	佐倉市将門	前方後円 (16m)	3・4		○	三角	盾持武人				V(下総型)	22
70	大鷲神社古墳	印旛郡酒々井町岩橋	円(30m)							石枕			26
71	鬼塚古墳	印旛郡酒々井町上本佐倉	前方後円 (不明)										2
72	竜角寺101号墳	成田市大竹	円? (36.8m)	3・4		○	台形	盾持、馬、犬、 鹿、水鳥	木棺直葬 箱式石棺		V		27
73	竜角寺103号墳	成田市大竹	前方後円 (21m)										24
74	瓢塚32号墳	成田市赤坂	円(26m)	3・4		○	台形	馬、人物、鳥	木棺直葬	石枕他	V	本書・ 28	
75	船塚古墳	成田市赤坂	前方後円? (75m)			○	台形				V		29
76	石塚古墳	成田市吾妻	前方後円 (40m)										28
77	公津原墳輪窟跡	成田市吾妻	墳輪窟跡	4・5		○	台形	人物			V	本書・ 28	
78	台方4号墳	成田市台方	円(10.5m)										28
79	五郎台3号墳	成田市台方	円(30m)										30
80	高野1号墳	成田市南羽鳥	前方後円 (48m)	4・5		○	台形	人物、水鳥			V		31
81	正福寺1号墳	成田市南羽鳥	円(20m)	4・5		○	台形	人物、水鳥、馬			V		31
82	荒海15号墳	成田市磯辺	前方後円 (27m)	3・4		○	三角				V(下総型)		32
83	宗吾・飯仲5号墳	成田市宗吾	前方後円 (20m)					馬					28
84	物井10号墳	四街道市物井	円(33m)										2

1節 房総における埴輪出土遺跡

番号	古墳名 又は 窟跡名 遺跡名	所在地	墳形(規模)	埴輪					埋葬施設	副葬品	時期	文献	
				円筒			形象						
				条・段	二次調整	透孔	突帯	底部調整					種類
85	清水遺跡	四街道市物井	不明									なし	
86	出口・鐘塚遺跡	四街道市物井	不明					人物				なし	
87	西大須賀低地古墳	香取郡下総町西大須賀	円(13m)	3・4		○	台形					V	33・34
88	木棧崎3号墳	香取郡下総町名木	前方後円(24m)	3・4		○	台形	馬、人物	木棺直葬	鉄鏃、ガラス小玉	V(下総型)		33
89	坂ノ上1号墳	香取郡下総町大和田	前方後円(35m)	3・4		○	三角	馬、人物			V(下総型)		33
90	月輪台5号墳	香取郡下総町高	前方後円(28m)										33
91	猿山2号墳	香取郡下総町猿山	円(不明)	3・4		○	台形				V(下総型)		34
92	菊水台2号墳	香取郡下総町滑川	前方後円(43m)										33
93	中台1号墳	香取郡下総町滑川	不明						箱式石棺?				33
94	猫作・栗山11号墳	香取郡下総町栗山	円(20m)					人物					35
95	舟塚原古墳	香取郡神崎町新	前方後円(54m)			○	台形	人物			V		36
96	武田1号墳	香取郡神崎町武田	円(16m)	3・4		○	三角				V		37
97	武田3号墳	香取郡神崎町武田	円(20m)	3・4		○	三角				V		37
98	古山4号墳	香取郡神崎町古原	前方後円(不明)										2
99	稲荷塚古墳	香取郡大栄町奈土	円(不明)										2
100	馬番塚1号墳	香取郡大栄町奈土	円(不明)										2
101	片野11号墳	佐原市片野	前方後円(32m)	3・4		○		人物、馬			V		38
102	片野23号墳	佐原市片野	前方後円(34m)	3・4		○		人物、家			V(下総型)		38
103	鶴崎天神台3古墳	佐原市鶴崎	円(20m)	(3・4)	あり	○	台形	有 人物、馬	木棺直葬	直刀、鉄鏃他	V		39
104	森戸大法寺古墳	佐原市森戸	前方後円(60m)	2・3	あり	○	台形				IV		116
105	禪昌寺山古墳	佐原市大戸川	前方後円(60m)						木棺直葬?	石枕他			40
106	浅間神社古墳	佐原市イ	前方後円(70m)										41
107	変電所裏古墳	佐原市仁井宿	前方後円(不明)			○	台形				V		41
108	堀之内3号墳	佐原市堀之内	不明(13m)	3・4									42
109	堀之内4号墳	佐原市堀之内	円(21m)	3・4		○	台形						42
110	三之分目大塚山古墳	香取郡小見川町三之分目	前方後円(121m)		あり	○□	台形				III		43
111	富田1号墳	香取郡小見川町富田	前方後円(40m)			○	三角			直刀、鉄鏃			44
112	富田2号墳	香取郡小見川町富田	前方後円(40m)			○	台形		箱式石棺	小札			44
113	富田3号墳	香取郡小見川町富田	前方後円(42.5m)			○	台形		石棺?				44
114	城山1号墳	香取郡小見川町城山	前方後円(68m)	3・4		○	三角	人物、家	横穴式石室	三角縁神獸鏡他	V(下総型)		45
115	城山4号墳	香取郡小見川町城山		3・4		○							45
116	城山5号墳	香取郡小見川町城山	前方後円(50m)	3・4		○	三角	人物	木棺直葬		V(下総型)		45・46
117	鍋木大神古墳	香取郡干潟町鍋木	前方後円(37m)					人物、馬					47
118	法王塚古墳	香取郡干潟町鍋木	前方後円(26m)					人物					47
119	鷺塚古墳	香取郡干潟町洲木	前方後円(18m)										47
120	大塚古墳	香取郡干潟町羽黒	前方後円(33m)										47
121	北条塚3号墳	香取郡多古町東松崎	前方後円(74m)					靱					48
122	林遺跡	香取郡多古町林	不明										2
123	坊内古墳	香取郡東庄町笹川	不明										2
124	東今泉古墳	香取郡東庄町東今泉	不明										2
125	藪里古墳	香取郡東庄町羽計	前方後円(20m)				台形		箱式石棺	ガラス小玉			49
126	後原古墳	鏡子市富原町	不明										2
127	神出古墳	鏡子市板井町	円(15m)										2

2章 各論

番号	古墳名 又は 竊跡名 遺跡名	所在地	墳形(規模)	埴輪					埋葬施設	副葬品	時期	文献
				円筒			形象					
				条・段	二次調整	透孔	突起	底部調整				
128	ホテエ古墳	銚子市塚本町	円(7m)									2
129	不詳	八日市場大寺										50
130	小川台5号墳	匝瑳郡光町小川台	前方後円(33m)	3・4		○	台形	人物、馬、鹿、水鳥	木棺直葬	直刀、刀子	V	51
131	殿塚古墳	山武郡横芝町中台	前方後円(88m)			○		人物、家、馬、靱	横穴式石室	頭椎大刀、銅鏡	V	52
132	姫塚古墳	山武郡横芝町中台	前方後円(58m)			○		人物、馬他	横穴式石室	方頭大刀	V	52
133	大里田辺台12号墳	山武郡芝山町大里	円(12m)			○	台形	人物			V	53
134	山田宝馬35号墳	山武郡芝山町山田	前方後円(30m)						横穴式石室	鉄鏃	V	55
135	山田出口11号墳	山武郡芝山町山田	円(20m)								V	53
136	山田出口79号墳	山武郡芝山町山田	前方後円(34m)								V	2
137	にわとり塚古墳	山武郡芝山町山田	前方後円(40m)	3・4		○	三角	人物、馬、にわとり	箱式石棺		V(下総型)	54
138	山田宝馬190号墳	山武郡芝山町山田	円(25m)						木棺直葬	玉纏大刀他	V	2
139	木戸前1号墳	山武郡芝山町高田	前方後円(40m)	2・3		○	台形		箱式石棺	直刀他	V(武蔵型)	51
140	殿部田1号墳	山武郡芝山町殿部田	前方後円(33m)	3・4		○	台形	人物、馬、家				55
141	白桃遺跡	山武郡芝山町大里宿						蛙				56
142	朝日の岡古墳	山武郡松尾町蕪木	前方後円(76m)					人物	横穴式石室	菅玉他	V	57
143	大堤古墳	山武郡松尾町大堤	円(不明)									51
144	埴谷1号墳	山武郡山武町麻生新田	前方後円(36m)					人物、馬	横穴式石室	鉄鏃、耳環		58
145	小川崎台3号墳	山武郡山武町戸田	前方後円(約25m)			○	台形	人物、馬、家、水鳥		直刀	V	
146	森台7号墳	山武郡山武町森	前方後円(26m)	3・4		○	台形	人物、馬		直刀、鉄鏃		59
147	経僧塚古墳	山武郡成東町野堀	円(45m)	2・3		○		人物、馬、家、水鳥	横穴式石室 箱式石棺		V(武蔵型)	60・61
148	西ノ台古墳	山武郡成東町板附	前方後円(90m)			○		人物、馬、家	横穴式石室			62
149	和田1号墳	山武郡成東町和田	前方後円(不明)									63
150	道庭古墳	東金市道庭	円(不明)					人物				64
151	人形塚古墳	千葉市緑区椎名崎	前方後円(41m)			○	台形	人物、馬	横穴式石室 箱式石棺	直刀	V	65
152	菊間天神山	市原市菊間	円(39m)	3・4			台形	有			V	66
153	菊間手永台	市原市菊間									IV	67
154	菊間5号	市原市菊間	円(21m)	3・4			低台形				V	68
155	小谷1号	市原市潤井戸	前方後円(40m)	3・4		○	三角形 台形				V(下総型)	69
156	南向原4(121)号	市原市藤井	円(24m)	2・3		○	台形	壺、人物、馬	直葬	鉄鏃、刀子	V	70
157	持塚1(144)号	市原市西広	円(40m)	3・4	Bヨコハケ		台形			変形獣文鏡	IV	71・72
158	西谷10(128)号	市原市加茂	円(19m)	2・3		○	台形 三角形			太刀、馬具	V	71・72
159	根田1(130)号	市原市根田	帆立貝(25m)	3・4		○	三角形	人物、馬	木棺直葬	耳環、小札 直刀、馬具他	V(下総型)	71・72
160	山王街道(園分寺台350号)	市原市山田橋	円(28m)		Bヨコハケ			家、馬、楯			IV	73
161	山倉1(203)号	市原市大坪	前方後円(45m)	2・3		○	台形	有 人物、鬘、馬、鳥、太刀			V(武蔵型)	74・75
162	君塚	市原市君塚	円(23m)	3・4		○	低台形				V(下総型)	71・72
163	御蔵目浅間神社	市原市五井	帆立貝(31m)	2・3 3・4		○	台形	人物馬、猪、鹿、鶏			V	72
164	吉野1号	市原市西国吉	前方後円(52m)	2・3		○	低台形	有			V	76
165	人見塚	市原市武士	前方後円(60m)									77
166	春日神社	市原市松崎		3・4			台形					69
167	姉崎二子塚	市原市姉崎	前方後円(116m)							石枕、立花 短甲、桂甲他	IV	78
168	山王山	市原市姉崎	前方後円(69m)	2+α		○	低台形 三角形	人物、動物、器財	粘土槨	変形四獣鏡 環頭太刀他	V	79
169	原1号	市原市姉崎	前方後円(65m)	2+α		○	低台形 三角形	靱、太刀、人物	木棺直葬	直刀、刀子、鉄鏃	V	80・81
170	鶴窪	市原市姉崎					低台形 三角形				V	73・80

1節 房総における埴輪出土遺跡

番号	古墳名 又は 竈跡名 遺跡名	所在地	墳形(規模)	埴輪					埋葬施設	副葬品	時期	文献
				円筒			形象					
				条・段	二次調整	透孔	突帯	底部調整				
171	お袖塚	袖ヶ浦市神納	円(28m)	2・3 3・4	タテハケ	○	台形 三角形		人物、靴、鞆、 太刀、動物		V	82
172	卒土神社南	袖ヶ浦市神納	円(30m)			□	台形				V	82
173	境2号	袖ヶ浦市新田	円(12m)		ヨコハケ タテハケ		台形				IV	83
174	大竹27号	袖ヶ浦市大竹	円(40m)	3・4		○	台形	円筒埴輪 棺			V	84
175	大竹30号	袖ヶ浦市大竹	円									85
176	高柳銚子塚	木更津市高柳	前方後円 (132m)		Bヨコ ハケ	○	高台形				IV	86
177	紙園大塚山	木更津市紙園	前方後円 (10m)		ヨコハ ケ	○		人物	金銅製肩庇付冑 銀製垂飾付耳飾他		IV	87・88
178	清見台A-3号	木更津市太田	円(19m)									89
179	清見台A-4号	木更津市太田	円(15m)	2・3	Bヨコ ハケ	▽	高台形	木棺直葬	白玉、鉄刀、鉄剣		IV	89
180	清見台A-8号	木更津市太田	円(24m)	朝顔	Bヨコ ハケ	○	高台形	木棺直葬	刀子		IV	89
181	池端	木更津市請西	円(23m)		Bヨコ ハケ		高台形	器財			IV	84
182	山伏作15号	木更津市請西	円(20m)			○	三角形				IV	90
183	山伏作26号	木更津市請西	円(15m)								IV	91
184	矢那大原	木更津市矢那	円(25m)		Bヨコ ハケ		高台形		二環鈴、馬具、鉄斧、 直刀他		IV	89
185	稲荷塚	木更津市大稲	前方後円 (55m)			○	台形				V	92
186	三山塚	木更津市茅野					台形				V	93
187	西ノ崎1号	木更津市真里谷										92
188	浜ヶ谷	木更津市畑沢	円(13m)			○	台形	木棺直葬	耳環、鉄鏃、ガラス 玉		V	94
189	畑沢埴輪窯	木更津市畑沢	地下式竈窯	4・5	タテハケ Bヨコハケ	○	高台形	盾持武人、蓋、 馬			IV	95
190	馬門	君津市南子安	円(20m)				台形	木棺直葬	太刀、鉄鏃、鉄剣、鉄鉾、 刀子、白玉、勾玉		V	96
191	貞元X	君津市貞元	円								V	97
192	川代4号	君津市六手	円(27m)			○	台形				V	98
193	孤山	君津市六手	前方後円 (57m)			○	台形 三角形	蓋、家、人物、 盾			V	98
194	万崎2号	君津市中島									V	99
195	稲荷山	富津市青木	前方後円 (106m)		ヨコハケ タテハケ	○	台形	髷、家			V	99
196	内裏塚	富津市二間塚	前方後円 (147m)		タテハケ Bヨコハケ	○	高台形	蓋、(人物)	竪穴式石 室	直刀、剣、鳴鏑他	IV	100~106
197	古塚	富津市二間塚	前方後円 (90m)			○	台形	有			V	99
198	九条塚	富津市下飯野	前方後円 (105m)			○	台形				V	99
199	武平塚南方	富津市下飯野	円								V	108
200	かす塚	富津市下飯野	前方後円								V	108
201	弁天山	富津市小久保	前方後円 (86m)		ヨコハケ		高台形		竪穴式石 室	冑、鎌、鏃	IV	107
202	富士見台2号	富津市湊	円(18m)	3・4	斜格子	○	高台形				IV	108
203	塚田	富津市岩坂	円(30m)			○	台形	人物			V	109
204	高山X	富津市更和	円									108
205	恩田原	安房郡富山町久枝			ヨコハケ	○	高台形	人物			IV	110~111
206	永野台	安房郡丸山町石堂			ヨコハケ	○	高台形	人物	木棺直葬	管玉、ガラス玉	IV	112
207	三門	夷隅郡岬町三門				□		人物、家、鳥	石棺	鏡、直刀		113
208	待山	長生郡一宮町一宮										114
209	草刈33号	市原市川焼	前方後円 (50m)			○	台形	人物			V	115

〈文献一覧〉

本書以前に千葉県内の埴輪出土遺跡について集成を行ったものに以下の4編がある。ここではこの4編については特に出典文献としての取り扱いを行わず、それ以外の原典についてのみ文献番号を付して一覧とする。

- ・杉山晋作他 1979 『千葉県文化財センター研究紀要』 4
 - ・安藤鴻基・神山崇他 1983 『房総風土記の丘年報』 6
 - ・杉山晋作 1985 「千葉県」『形象埴輪の出土状況』埋蔵文化財研究会
 - ・萩原恭一 1985 「千葉県における埴輪の様相と展開」『第6回 三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性』
- 1 岡田光広 1986 『関宿城跡』 (財)千葉県文化財センター
 - 2 千葉県教育委員会 1990 『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』
 - 3 下津谷達男 1957 「千葉県野田市川間香取原の2古墳」『日本考古学協会第20回研究発表要旨』
 - 4 // 1948 「初石古墳群発掘概報」『上代文化』 18
 - 5 流山市教育委員会 1972 『東深井遺跡』
 - 6 下津谷達男 1951 「千葉県新川村古墳群発掘調査概報」『上代文化』 20
 - 7 千葉県教育委員会 1964 『流山町東深井古墳』
 - 8 東深井古墳群発掘調査団 1969 『流山市東深井古墳群昭和43年度概報』
 - 9 下津谷達男 1960 「柏市花野井の大塚古墳」『地方史研究協議会千葉県大会研究発表要旨』
 - 10 古宮隆信 1951 「千葉県東葛飾群柏町天神台・風早村船戸古墳発掘調査概報」『上代文化』 20
 - 11 東京大学文学部考古学研究室 1969 『我孫子古墳群』
 - 12 我孫子市教育委員会 1979 『子の神7号墳発掘調査略報』
 - 13 松戸市 1961 『松戸市史 上巻』
 - 14 小林三郎・熊野正也 1967 『法皇塚古墳』
 - 15 船橋市 1959 『船橋市史 前編』
 - 16 習志野市教育委員会 1967 『鷺沼古墳』
 - 17 八千代市 1978 『八千代市の歴史』
 - 18 東京文化史学会 1975 『小林古墳群』
 - 19 千葉県文化財センター 1992 『千葉県文化財センター年報』 17
 - 20 大田区立郷土博物館 1981 『はにわに見る古代東国の人々』
 - 21 三浦和信他 1977 『吉高山王遺跡』 印旛村教育委員会
 - 22 早稲田大学考古学研究室 1961 『印旛・手賀』
 - 23 千葉県文化財センター 1993 『千葉県文化財センター年報』 18
 - 24 原田昌幸・萩原恭一 1985 「最近の踏査成果から見た竜角寺古墳群」『MUSEUMちば』 16
 - 25 平野元三郎 1962 「千葉県佐倉市馬渡姫宮古墳」『日本考古学年報』 11

- 26 白石太一郎 1987 「大鷲神社古墳発見の石枕とその提示する問題」『千葉史学』10
- 27 安藤鴻基他 1988 『千葉県成田市所在 竜角寺古墳群第101号墳発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会
- 28 千葉県企業庁 1975 『公津原』
- 29 永沼律朗 1992 「印旛沼周辺の終末期古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
- 30 成田史談会 1961 『成田市の古墳群』
- 31 (財)印旛郡市文化財センター 1991 『(財)印旛郡市文化財センター年報』7
- 32 荒海古墳群発掘調査団 1975 「荒海古墳群第15号墳発掘調査報告」『成田市の文化財』6
- 33 下総町 1990 『下総町史』
- 34 轟俊二郎 1973 『埴輪研究』1
- 35 (財)香取郡市文化財センター 1993 『事業報告』2
- 36 舟塚原古墳調査団 1972 『舟塚原古墳』
- 37 武田古墳群調査団 1972 『武田古墳群』
- 38 芝山はにわ博物館 1976 『下総片野古墳群』
- 39 (財)香取郡市文化財センター 1993 『事業報告』2
- 40 杉山晋作他 1987 「佐原市禅昌寺山古墳の遺物」『古代』83
- 41 宮重行・萩原恭一他 1990 『佐原市仁井宿東遺跡・牧野谷中遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 42 渋谷興平他 1984 『堀之内遺跡』
- 43 平野功・萩原恭一他 1987 『三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』小見川町教育委員会
- 44 平野功 1991 「三之分目大塚山古墳をめぐる諸問題」『千葉文華』26
- 45 小見川町教育委員会 1978 『城山第一号前方後円墳』
- 46 丸子亘・渡辺智信 1966 「城山第5号前方後円墳第一次調査概報」『海上文化』創刊号
- 47 千潟町 1975 『千潟町史』
- 48 千葉県教育委員会 1980 『千葉県の文化財』
- 49 東庄町教育委員会 1972 「婆里古墳」『羽計古墳群』
- 50 八日市場市 1982 『八日市場市史』
- 51 芝山はにわ博物館 1975 『下総小川台古墳群』
- 52 滝口宏・久地岡榛雄 1963 『はにわ』日本経済新聞社
- 53 千葉県教育委員会 1992 『千葉県主要古墳群測量調査報告書—山武地区古墳群(4)』
- 54 岡田誠造 1982 『芝山町山田古墳群・山田出口遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 55 (財)千葉県文化財センター 1987 『千葉県文化財センター年報』13
- 55 芝山はにわ博物館 1980 『上総殿部田・宝馬古墳』
- 56 濱名徳永・市毛勲 1965 「鮭の埴輪」『古代』44
- 57 軽部慈恩 1957 「千葉県山武郡朝日ノ岡古墳」『日本考古学年報』5
- 58 川戸彰 1957 「千葉県山武郡埴谷古墳群調査(概報)」『上代文化』27

2章 各論

- 59 吉田章一郎他 1983 『千葉県山武郡森台古墳群の調査』
- 60 市毛勲 1971 「千葉県山武郡成東町経僧塚古墳の調査」『史観』83
- 61 市毛勲 1985 「人物埴輪における隊と列の形成」『古代探叢II』早稲田大学出版部
- 62 軽部慈恩 1958 「千葉県山武郡西ノ台古墳」『日本考古学年報』7
- 63 成東町教育委員会 1975 『板附古墳群』
- 64 東金台遺跡調査会 1980 『東金台遺跡』1
- 65 (財)千葉県文化財センター 1986 『千葉県文化財センター年報』12
- 66 (財)市原市文化財センター 1985 『年報一昭和57・58年度』
- 67 近藤 敏氏の御教示による。
- 68 房総考古資料刊行会 1974 『菊間遺跡』
- 69 (財)市原市文化財センター 1992 『市原市小谷1号墳』
- 70 上総国分寺台遺跡調査団 1976 『南向原』
- 71 上総国分寺台遺跡調査団 1981 『上総国分寺台発掘調査概報』
- 72 (財)市原市文化財センター 1987 『千葉縣市原市御座目浅間神社古墳』
- 73 上総国分寺台遺跡調査団 1982 『上総国分寺台発掘調査概報』
- 74 米田耕之助 1976 「上総山倉1号墳の人物埴輪」『古代』59・60合併号
- 75 川西宏幸 1988 「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』
- 76 市原市教育委員会 1988 『昭和62年度市原市埋葬文化財緊急調査報告書』
- 77 武士遺跡発掘調査団 1976 『武士遺跡』
- 78 大場磐雄・亀井正道 1952 「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』37-3
- 79 市原市教育委員会 1980 『上総山王山古墳発掘調査報告書』
- 80 原遺跡調査会 1984 『原遺跡』
- 81 千葉県教育委員会 1971 『原1号墳発掘調査概報』
- 82 袖ヶ浦町教育委員会 1979 『お袖塚古墳遺構確認調査報告書』
- 83 (財)君津郡市文化財センター 1985 『境遺跡』
- 84 (財)君津郡市文化財センター 1989 『年報N0.7』
- 85 (財)君津郡市文化財センター 1988 『年報N0.6』
- 86 築比地正治 1982 「高柳銚子塚古墳の埴輪」『宇麻具多』3
- 87 村井崑雄 1966 「千葉県木更津市大塚山古墳出土遺物の研究」『ミュージアム』189
- 88 東京国立博物館 1986 『東京国立博物館目録一古墳遺物篇(関東III)』
- 89 清見台古墳群発掘調査団 1968 『清見台古墳群発掘調査報告』
- 90 木更津市教育委員会 1987 『請西遺跡群確認調査報告書』
- 91 (財)君津郡市文化財センター 1993 『年報N0.11』
- 92 (財)君津郡市文化財センター 1989 『三箇遺跡群VI』
- 93 木更津市教育委員会 1990 『丹過遺跡確認調査報告書II』

- 94 (財)君津郡市文化財センター 1990 『小浜遺跡群III』
- 95 安藤鴻基 1974 「木更津市畑沢埴輪窯址の調査速報」『古代』57
- 96 君津市教育委員会 1974 『馬門古墳発掘調査報告』
- 97 小沢 洋氏の御教示による。
- 98 君津市教育委員会 1989 『君津市内遺跡群発掘調査報告書』
- 99 富津市教育委員会 1991 『内裏塚古墳群発掘調査報告書』
- 100 柴田常恵 1906 「上総国君津郡飯野村内裏塚」『東京人類学雑誌』249
- 101 坪井正五郎 1906 「千葉県君津郡飯野地方の古墳」『東京人類学雑誌』251
- 102 谷中国樹 1927 「原史時代又古墳時代」『千葉県君津郡々史』上巻
- 103 富津市教育委員会 1984 『二間塚遺跡群確認調査報告書』
- 104 富津市教育委員会 1985 『二間塚遺跡群確認調査報告書II』
- 105 千葉県教育委員会 1986 『内裏塚古墳測量調査報告書』
- 106 甘粕 健 1963 「内裏塚古墳群の歴史的意義」『考古学研究』10-3
- 107 富津市教育委員会 1979 『史跡弁天山古墳』
- 108 (財)君津郡市文化財センター 1987 『富士見台遺跡』
- 109 富津市教育委員会 1991 『町田遺跡群』
- 110 千葉県教育委員会 1954 『田子台遺跡』
- 111 (財)千葉県文化財センター 1992 『房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)』
- 112 朝夷地区教育委員会 1982 『永野台古墳』
- 113 岬町文化財審議委員会 1973 『岬町文化史年表』
- 114 上智大学史学会 1968 『東上総の社会と文化』
- 115 伊藤智樹氏の御教示による。
- 116 荻 悦久 1994 「千葉県佐原市森戸大法寺古墳の埴輪」『東邦考古』18

2節 公津原埴輪生産遺跡

1 はじめに

房総半島北部に広がる下総台地のほぼ中央に位置する「公津原遺跡群」は、1969年から1971年にかけて、成田ニュータウンの造成に伴って大規模な発掘調査が行われた。この一連の発掘調査の中で、天王・船塚4号墳(TF4号墳)の調査時において墳丘盛土内より明らかに埴輪に樹立されたものではないと判断される状況で多量の埴輪片が出土した。このことから、天王・船塚4号墳周辺に埴輪窯跡が存在している可能性が大きいと考えられたため、天王・船塚4号墳下の台地斜面部に確認トレンチを設定し、窯跡の検出につとめた。その結果、埴輪窯跡と竪穴遺構各1基が検出され、さらに天王・船塚4号墳の墳丘下・周溝間からも埴輪窯跡と関連すると考えられる竪穴遺構3基が検出されるに至った。このように埴輪窯跡の調査例が必ずしも多くなかった当時において、調査の早い段階で埴輪窯跡の存在を想定し、当初の調査対象範囲外であった台地斜面の立木間にトレンチを入れるなど、困難な状況下でその存在を確認した点は高く評価されよう。

この公津原埴輪生産遺跡の調査成果については、すでに成田ニュータウン内遺跡群発掘調査の正式報告書『公津原』の中にL o c. 50・51として収められている(千葉県企業庁1975)。しかし、千葉県内において埴輪生産遺跡が本遺跡を含めて未だに2例しか確認・調査されていない現状にあって、埴輪生産のあり方を考えるには、本遺跡の評価が重要な位置を占めるといえる。また、本遺跡は、埴輪窯跡と住居跡あるいは工房跡の可能性のある竪穴遺構が揃っているなど、埴輪生産遺跡の構造を知る点においても重要な資料であると考えられる。従って、ここで公津原埴輪生産遺跡の調査成果をあらためて整理し、資料を再提示することにも大きな意義があるといえよう。

なお、報告書『公津原』において、遺構番号に多少の混乱が認められる。そのため、今回用いる遺構番号については、発掘調査時の遺構番号とし、『公津原』本文編とは以下の通りに対応する。

	『公津原』本文編	本稿使用遺構番号
埴輪窯跡	51-001	51-001 (変更なし)
竪穴遺構	51-002	50-001
	51-003	50-002
	50-001	50-003
	50-004	51-002



第2図 公津原埴輪生産遺跡位置図 (1/50,000)

新橋新田 新橋 大上海道 中沢 向台 台畑 立沢新田 富



2 環境

「公津原遺跡群」は、西を印旛沼低地に、東を利根川水系・根木名川の支川・小橋川によって挟まれた標高約30～34mの台地上に広がっている(第2・3図)。この台地は、特に東側が小橋川から樹枝状に入り込む支谷によって複雑に開析されており、公津原埴輪生産遺跡も小橋川からこの台地の中を東西にのびる支谷の最奥部の台地南斜面に位置している。

本遺跡の東約100mの同じ台地上には、本遺跡において生産された埴輪の供給先かどうかで議論の分かれる、全長約80mの前方後方墳とされる船塚古墳がある。また、支谷を隔てた東の台地上には埴輪を伴う円墳瓢塚32(H32)号墳が位置している。

「公津原遺跡群」内では、後期古墳を中心とする3群100基以上にのぼる古墳が調査・確認されているにも関わらず、確実に埴輪を持つことが確認されている古墳となると船塚古墳・瓢塚32(H32)号墳程度といったようにきわめて限られており、この点が「公津原遺跡群」の特徴の一つといえよう(註1)。このような状況の中で埴輪生産遺跡の存在がとらえられていることは、埴輪の生産と供給の問題を考える上で注目される。

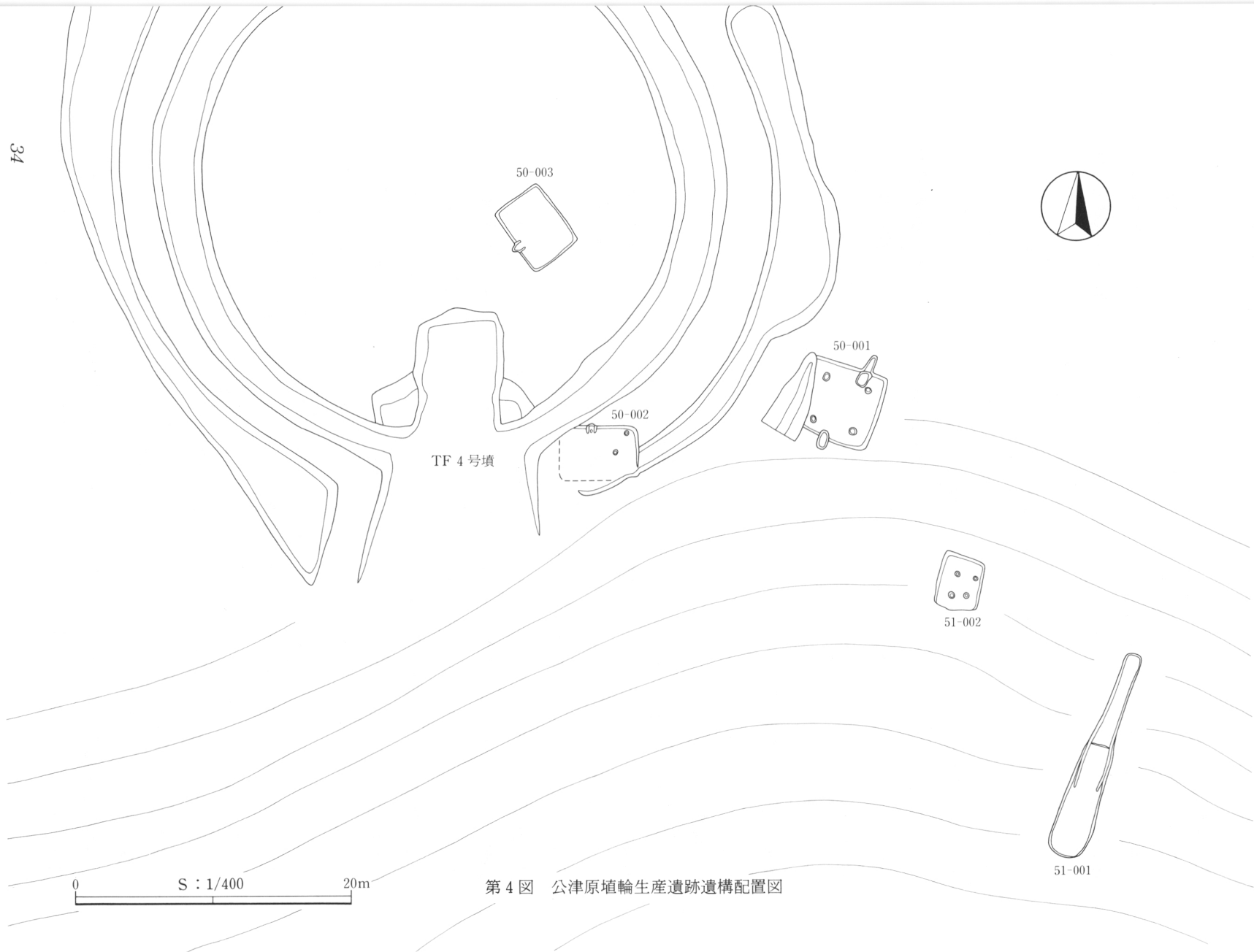
3 遺構

公津原埴輪生産遺跡は、台地平坦面縁辺部に竪穴遺構50-001・002と天王・船塚4号墳の墳丘下の台地平坦面に竪穴遺構50-003があり、50-001の南東の台地南斜面にはほぼ等間隔に並ぶように竪穴遺構51-002と埴輪窯跡51-001が位置している。

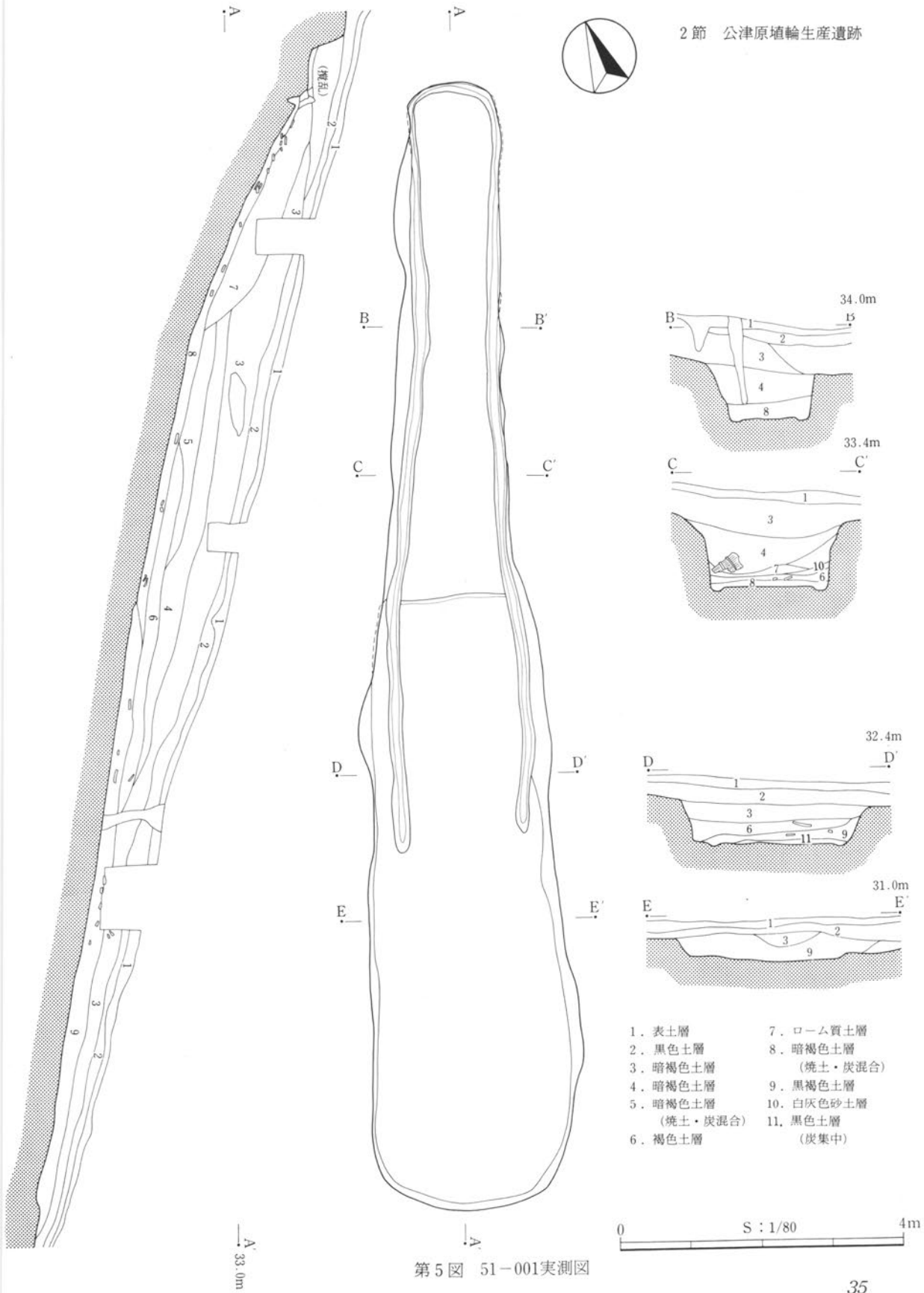
以上が遺構の検出された範囲であるが、これらが埴輪生産関係遺構の全てであるかについては、調査当時より疑問が投げかけられている。それは、埴輪窯跡検出の契機ともなった天王・船塚4号墳の墳丘盛土内より多量の埴輪片が出土しているが、それらの埴輪片が調査された遺構群からもたらされたものとは考えられないという点である。従って、調査でとらえられなかった遺構、例えば別の埴輪窯跡や埴輪集積場跡等が存在していた可能性は残されている。確かに斜面部については、調査時の制約から天王・船塚4号墳より西側における遺構の探査は必ずしも十分にできなかったようである。しかし、地形的には天王・船塚4号墳の西側は支谷の谷尻に当たり、浅い谷地形が北西方向に湾入して南斜面が切れており、大きく地形が変換していることから、斜面部の遺構群がより西側に展開していたとしてもその数はきわめて限られていると考える。

結局、先の天王・船塚4号墳の墳丘中の埴輪の問題については解明されないが、天王・船塚4号墳の造営を含めて後世の削平によって失われた埴輪生産関連遺構があるものの、埴輪生産遺跡の規模としては大きなものではなかった、ということとどめざるをえない。

なお、遺構配置図(第4図)の「等高線」状の線は、単に台地斜面の「流れ」を諸記録から復原・表現したものにすぎず、等高線ではないことをあらかじめ了承していただきたい。



第 4 図 公津原埴輪生産遺跡遺構配置図



- | | |
|----------|------------|
| 1. 表土層 | 7. ローム質土層 |
| 2. 黒色土層 | 8. 暗褐色土層 |
| 3. 暗褐色土層 | (焼土・炭混合) |
| 4. 暗褐色土層 | 9. 黒褐色土層 |
| 5. 暗褐色土層 | 10. 白灰色砂土層 |
| (焼土・炭混合) | 11. 黒色土層 |
| 6. 褐色土層 | (炭集中) |

0 S : 1/80 4m

(1) 埴輪窯跡

51-001 (第5・6図、巻頭図版1・2)

埴輪窯跡は、台地南斜面の標高31~35mに位置し、全長約16mである。窯体は長さ約10.9mで、粘性の弱い砂質土層を掘り込んでつくられており、排水溝が巡らされている。焼成部は幅約1.6m、窯尻部が攪乱によって一部破壊されているが遺存度のよい部分において深さ約0.6mを測り、壁はほぼ直に立ち上がる。燃焼部と焼成部の境は、幅が約2.2mに広がる遺構のほぼ中央部と思われ、床面に5cm程度の低い段差が認められる。この段差を境とした場合、焼成部の長さは約7.3mで、床面積は排水溝を含めて約9.8㎡となる。焼成部と灰原の境界については明確ではないが、排水溝が切れる付近に当たると思われる。灰原は幅約2.8m、長さ約5.9mの浅い掘り込みとなっている。

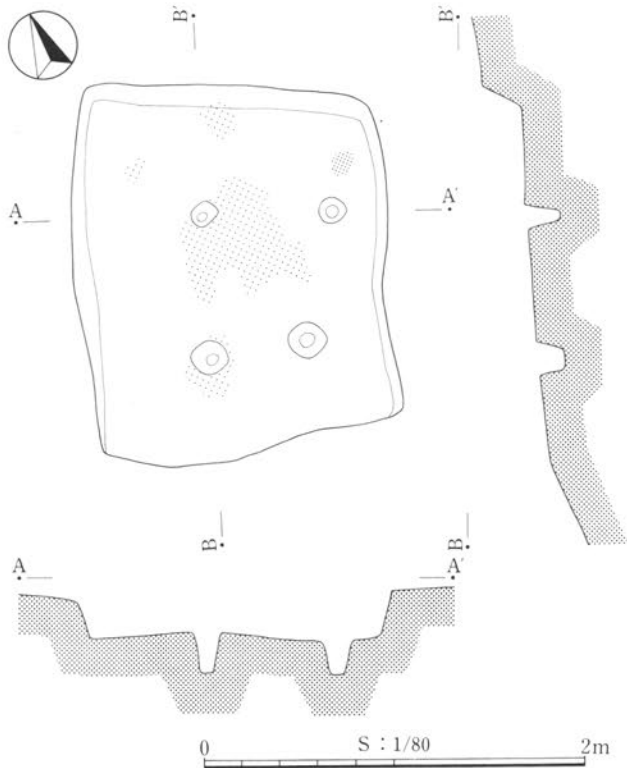
床面は、灰原から燃焼部までは約9°前後の角度でゆるやかに上がっていき、焼成部より床面角度が若干増して約12°となり、焼成部奥でさらに20°に床面角度が増している。焼成部床面には、燃焼部と焼成部の境の段以外に段差等は認められない。

床面上には埴輪細片、焼土、炭を多く含む黒褐色土系の土層が堆積している。これを詳細に観察すると、床直上に薄く炭集中層があり(11層)、その上に焼土ブロックを多く含む層(8層)、焼土ブロックとローム質土・白灰色砂質土を含む層(6層)の順に堆積し、この6層の中から最終作業時の埴輪片が出土しているようである。天井部は失われているが、焼成部の覆土中に酸化したローム質土層(6・7層)が推積していることから、地下式と考えられている。

遺物は、覆土中より埴輪の細片が多量に出土しているほか、焼成部床面の全面、特に床面角度が増す焼成部中央から奥にかけて大形の破片が敷き詰められたように出土している(第6図、巻頭図版2)。この焼成部床面より



第6図 51-001遺物出土状況



第7図 51-002実測図

出土した埴輪片の大部分は、色調が灰褐色あるいは暗赤褐色で、網目状の細かい割れ目が入るなど非常にもろく、大きく歪んでいる。破片の破口もかなり劣化が進んでおり、二次的に被熱したと見られる。また、接合関係を見ると、接合する率はきわめて低く、かなり接合できても全周することなく半身にとどまる傾向があるほか、同一個体と思われるような状況で隣接して出土しているものでさえ別個体であり、接合できた個体も破片ごとに器面の状態や色調が異なる。このような埴輪の出土状況や遺存状況から、そのほとんどが焼き台として転用されていたものと考えられる。

(2) 竪穴遺構

51-002 (第7図、巻頭図版3)

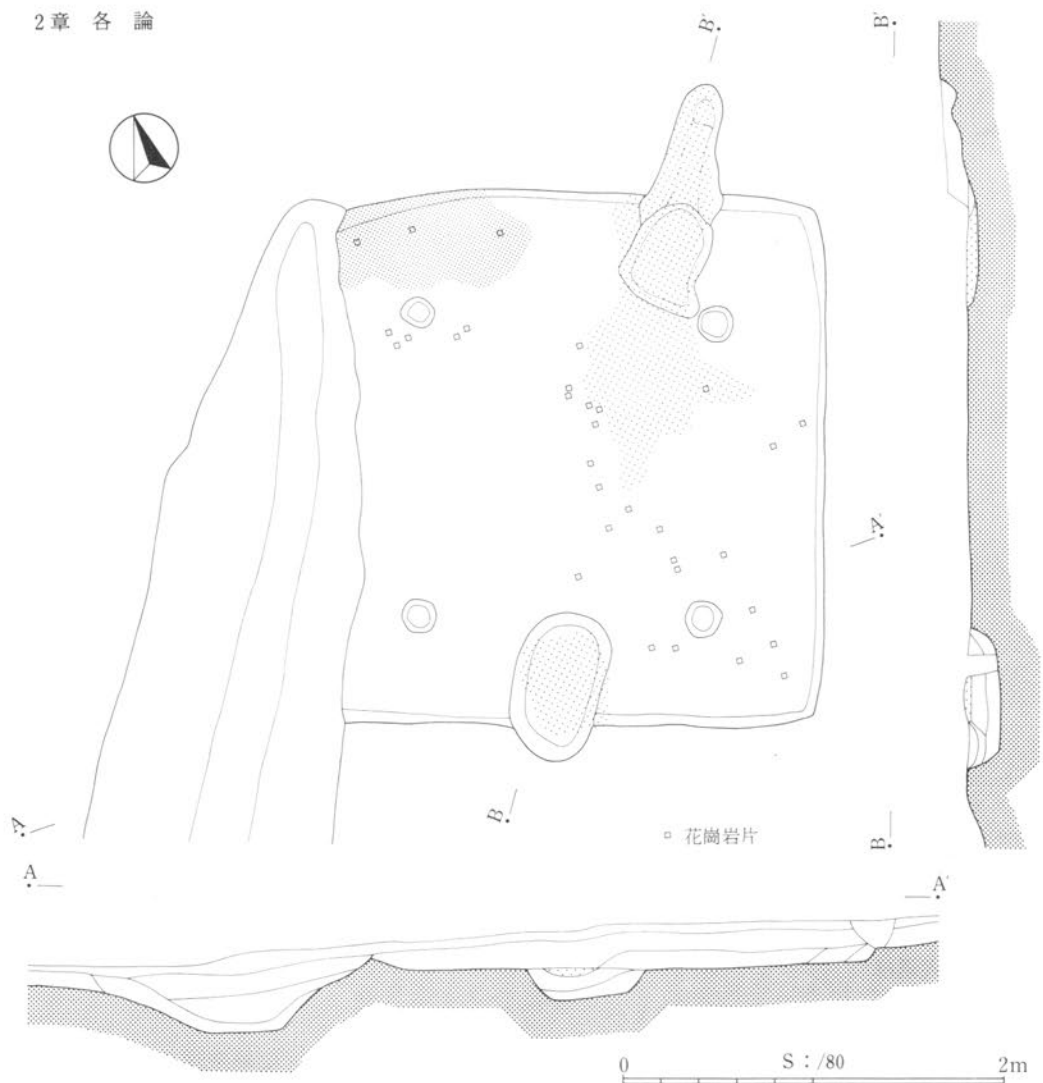
天王・船塚4号墳東の台地斜面部において検出された竪穴遺構で、埴輪窯跡51-001と50-001のほぼ中間に位置している。南壁は流失し、他の壁も遺存状況は良くないが、東西軸長3.3m・南北軸長3.9mの長方形プランをなすと考えられる。支柱穴は4カ所検出されているが、その配置は全体的に東側に寄っている。床面には、「カマドのようによく焼けた(調査時所見)」焼土が認められている。

遺物は、北壁周辺に土製玉と円筒埴輪片が出土している。

50-001 (第8図、巻頭図版3)

天王・船塚4号墳の東、台地上平坦部の縁辺部に位置する竪穴遺構。西壁は後世の溝によって失われているが、南北軸長5.6m、東西軸長推定5.6mの方形プランをなすと考えられる。支柱穴は、竪穴対角線上に4カ所検出されている。カマド・炉跡については確認されていない。

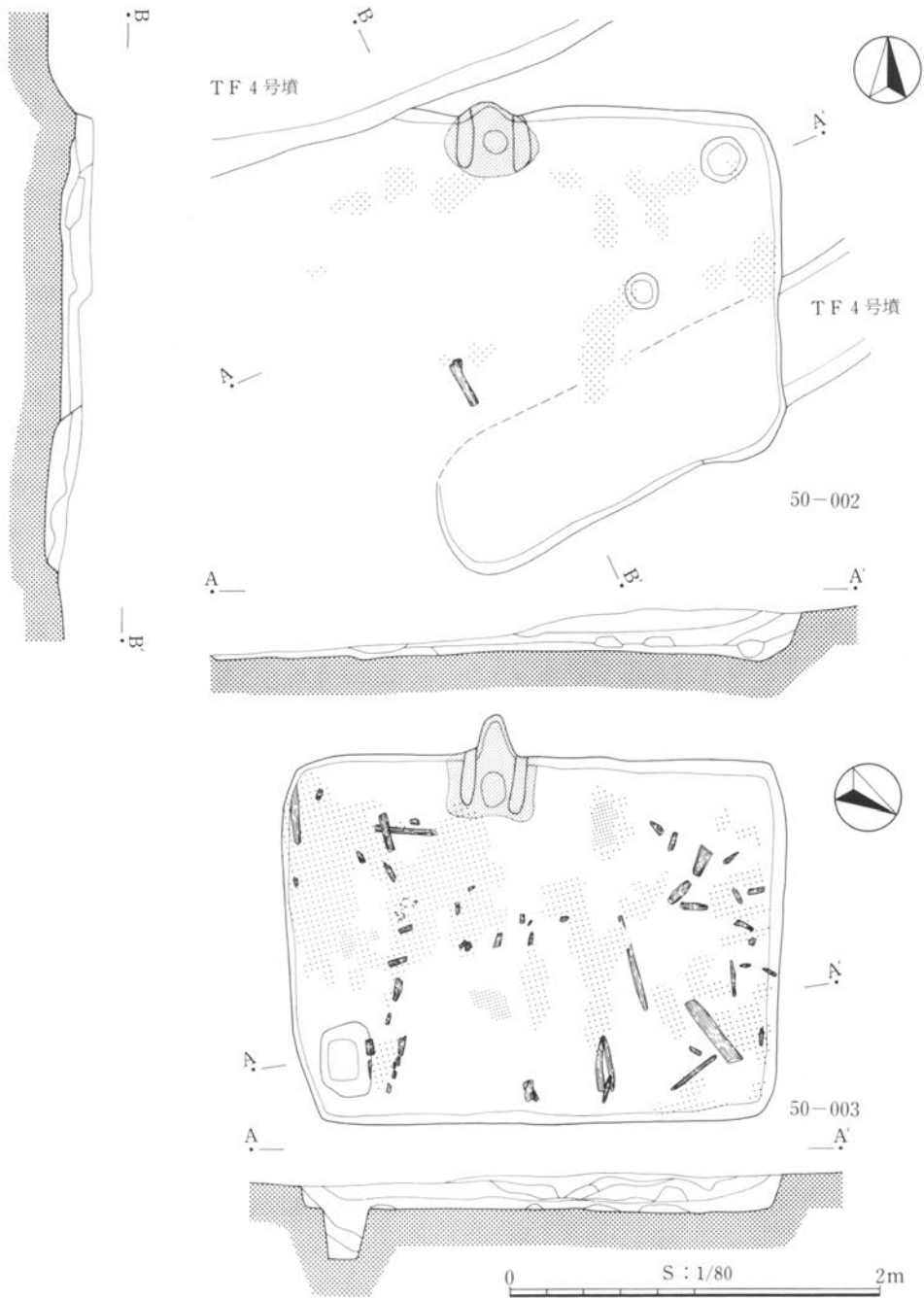
本遺構の特徴としては、北壁沿いの床上に白色粘土集中と、この粘土集中周辺及び南壁付近において花崗岩片が多く出土した点あげられる。白色粘土集中部は、北壁西寄り壁に接し



第8図 50-001実測図

て厚さ約10cmで2m×1mの範囲に広がっている。粘土中には、白色の長石粒を含んでおり、埴輪窯跡出土の埴輪の胎土と共通していることから、埴輪の原材料と考えられる。また、花崗岩片は最小0.5cm、最大5cm程のもので48点約200g出土しており、不透明な白色の粗粒(長石)を基調として灰色の粗粒(石英)と銀色に輝く片状粒(雲母)の結晶質粒からなる(巻頭図版6)。本遺跡出土埴輪の胎土の混和材として用いられている「長石粒」は、この花崗岩と同質のものと思われ、特に形象埴輪に含まれるものはほぼ間違いないと考える。よって、これらの花崗岩片が埴輪の混和材の「原材料」であった可能性が高い。

さらに本遺構で留意すべき点としては、北壁東寄りと南壁ほぼ中央において焼土集中部が認められることである。北壁の焼土集中部は、竪穴内床面の不整形の浅い落ち込みから竪穴外に舌状に延びる掘り込み内に堆積しており、南壁の焼土集中部は竪穴内外にかかる隅丸方形の掘り込みに伴うものである。北壁焼土集中部から南壁焼土集中部にかけての竪穴床面には焼土



第9図 50-002、50-003実測図

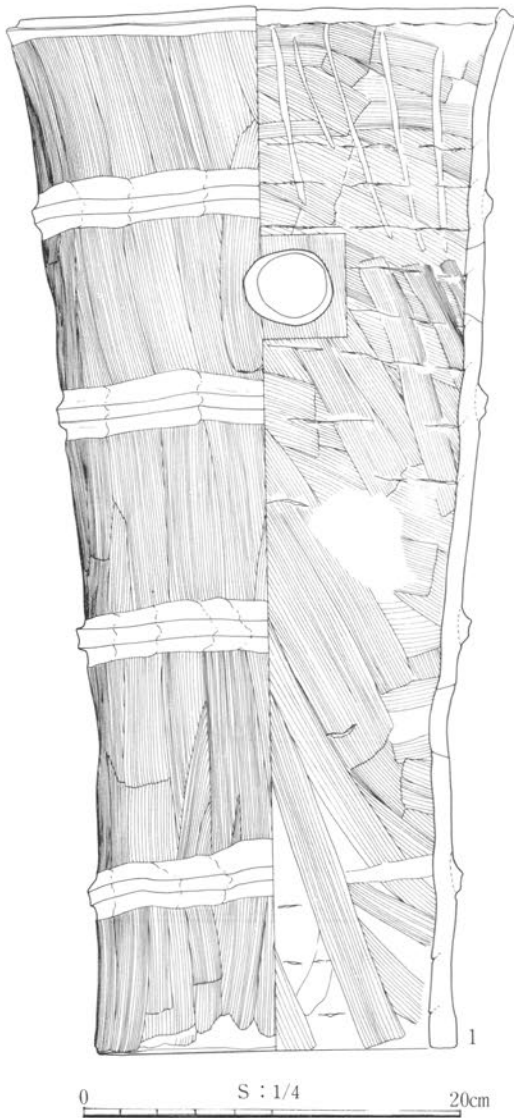
が散っていたことが調査時に記録されており、これらの焼土集中部からはいずれも赤変し磨滅した埴輪細片と「埴輪のような(調査時所見)」焼け粘土塊が多く出土していることから、本来は同一遺構であった可能性がある。

遺物は、溝跡によって切られた西壁周辺に円筒埴輪上半1個体分が出土している。

50-002 (第9図)

天王・船塚4号墳の二重周溝の間に位置する竪穴遺構で、南・西壁が古墳周溝によって切られ、失われている。従って、本遺構の正確な規模・プランについては明らかではないが、南壁を切る古墳周溝と竪穴東壁が交わる部分において、周溝南壁に竪穴南東隅とも思われる「膨らみ」が認められ、これを竪穴隅とした場合、50-003と類似した規模・構造の竪穴遺構であったと考えられよう。

遺構内の覆土は、床面上には炭化材と焼土が散り、その上に褐色土がレンズ状に堆積した後、ロームブロック混じりの土層が堆積しており、人為的に埋め戻された状況を見せている。



第10図 51-001出土円筒埴輪 1

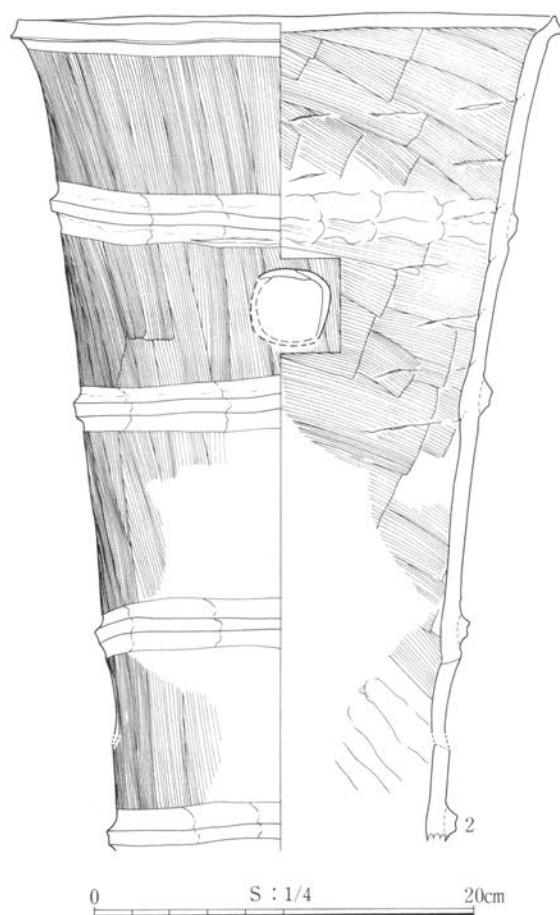
北東隅と竪穴の東西軸線上にピットが検出されているが、これらが柱穴であるかは不明である。カマドは北壁西寄りに位置し、煙道を壁外に舌状に若干掘り込み、燃焼部を砂混じり白色粘土で囲っている。

遺物は、円筒埴輪細片がカマド前面付近の床面を中心に多く出土している。

50-003 (第9図、巻頭図版3)

天王・船塚4号墳の墳丘下より検出された東西軸長4.0m・南北軸長5.4m、長方形プランの竪穴遺構である。竪穴床面上には多くの焼土・炭化材が広がっており、竪穴覆土上層には50-001と同様に人為的に埋め戻されたようにローム混じりの土層が堆積している。柱穴は検出されていないが、東隅に長方形の貯蔵穴があり、自然流入による埋没を思わせる土層が堆積している。カマドは西壁南寄りに位置しており、構造的には50-002のものと同様である。

遺物は、円筒・形象埴輪の細片が竪穴内に散在しているほか、カマド周辺より土師器坏形土器・椀形土器片が出土している。



第11図 51-001出土円筒埴輪 2

と考えられる。形態的には4条突帯の5段構成で、底部から直立気味に立ち上がり、最上段で緩やかに口縁部が外傾して開くものである。口縁部は、内外面に丁寧な横ナデが施され、口唇部上端は鋭く上方にのび、下端はつまみ出したように外側にのびる。突帯は断面形がM字形で、高さはあまり高くはないが、貼り付け及びその後の調整は極めて丁寧で、突帯上辺の稜線もかなりシャープに作り出されている。透かし孔は、一対の円形のもが2段目と4段目に直交するようにあけられている。器面の調整は、外面には7本/cm単位のタテハケが入れられており、基本的にはハケ目は底部から口縁部まで通っているようであるが、器面の風化が激しく詳細は明らかではない。また、内面には部分的に輪積み成形痕を残すが、概して丁寧に指でナデ消した後、底部から口縁部まで丁寧にハケナデが施されている。

3～9は、口縁部資料である。3のみ燃焼部と灰原の境で出土しており、他は焼成部床上からの出土である。いずれも1/3以上遺存していた破片資料より復原したものであり、それによると口径は30cm前後となるが、資料の歪みが大きいことから誤差を含んでいると思われる。形態的にはバラエティーは乏しく、口唇部上端が上方に、下端が外側につまみ出したように作

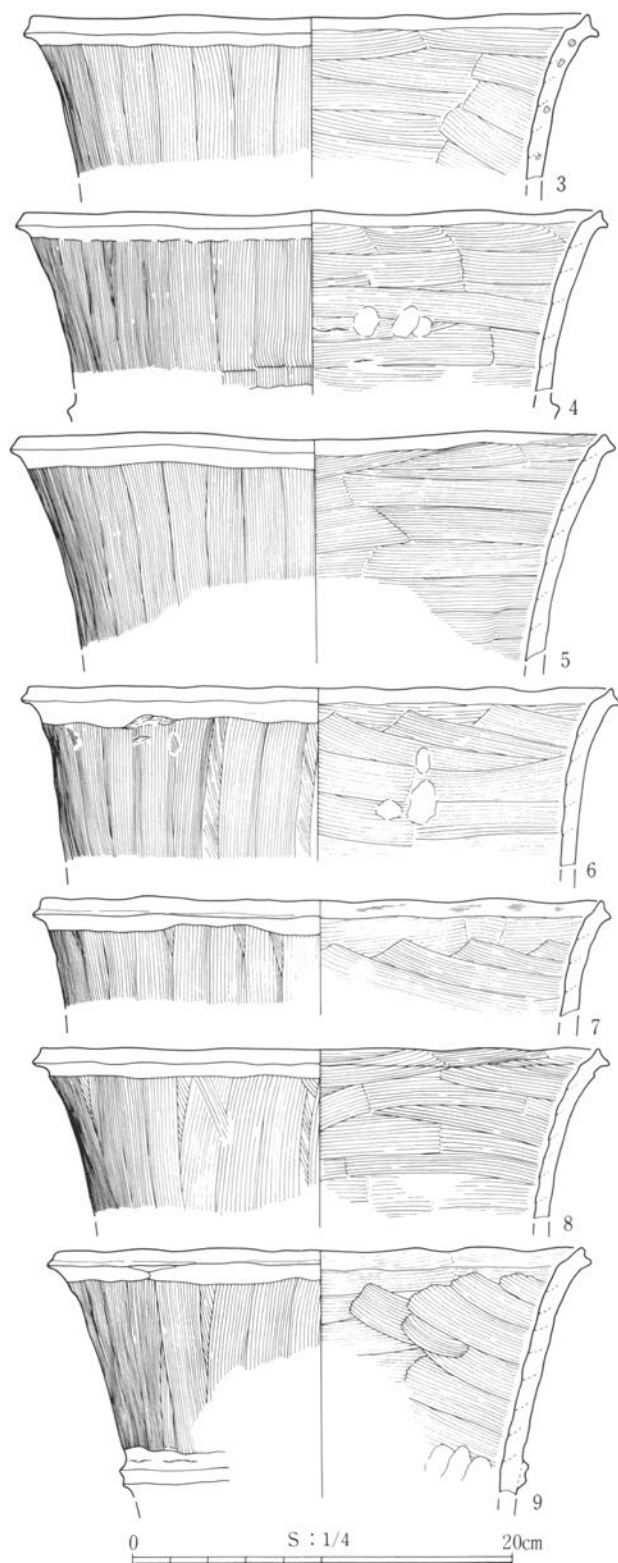
4 遺物

前述の様に、埴輪窯跡より出土した埴輪の大部分は焼き台と考えられ、表面に網目状のひびが入り、焼き歪みも大きいほか、全体的に接合率も低い。従って、全体像が明らかな資料は乏しく、今回提示する資料の多くも復原されたサイズや形態に小さからぬ誤差を含んでいる可能性が高いことをあらかじめ指摘しておきたい。

(1) 円筒埴輪

埴輪窯跡出土普通円筒埴輪(第10～23図)

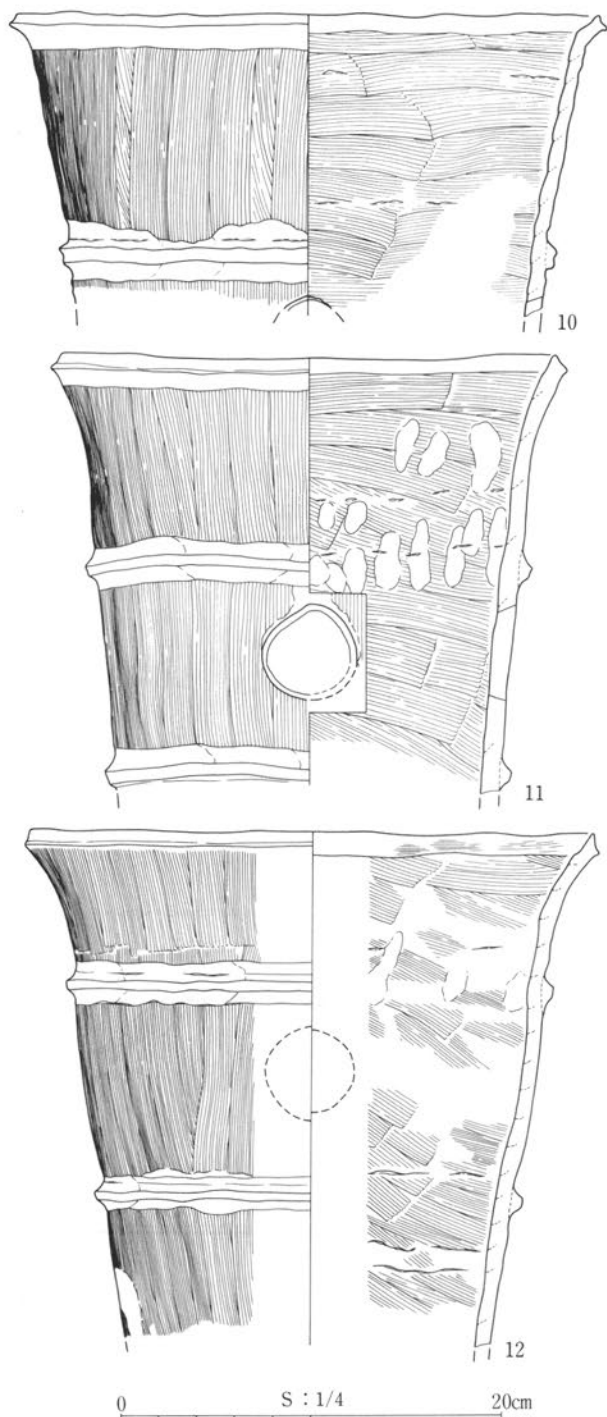
公津原埴輪生産遺跡において生産された円筒埴輪の全体像がわかる数少ない資料としては、1・2をあげることができる。1は、焼成部と燃焼部の境で完形に近い状態で出土している。2は焼成部奥の床上から出土しており、底部を失っているものの基本的には1と類似するもの



第12図 51-001出土円筒埴輪3

られている。外面調整には、7本/cm単位のタテハケが施されているが、拓影図26~44にも見られるように、まず左上がりに一次タテハケを入れた後、やや右上がりに二次タテハケを施し、二次タテハケの間に一次タテハケのハケ目が残されている。そのため、円筒埴輪最上段のタテハケはあたかも「鋸歯紋状」をなしているが、これが視覚的に意図されたものかについては明らかではない。口唇部直下は横ナデによってハケ目がナデ消されているものが一般的であるが(26~35)、一部にこのナデ消しが甘いもの(36~40)、ナデ消されないものも認められる(41~44)。しかし、口縁部の遺存度の良い資料を観察すると、その大部分が単に口縁部の横ナデが全周しきっていないことによるものであり、特にこれが口縁部を分類する基準とはなり得そうもない。内面調整は、断続的に横方向に間断なくかなり丁寧にハケナデを施している。

なお、3では、割れ口にほぼ等間隔に並ぶ径3~5mmの炭化した植物繊維の断面が観察されている(巻頭図版5)。位置的には成形時の輪積みの接合面に当たる。反対側の破口は、二次的な焼成のためか劣化が激しいこともあって、同様のものは確認できず、混和物であるのか縄状の構造を持つものかは明らかではない。



第13図 51-001出土土円筒埴輪 4

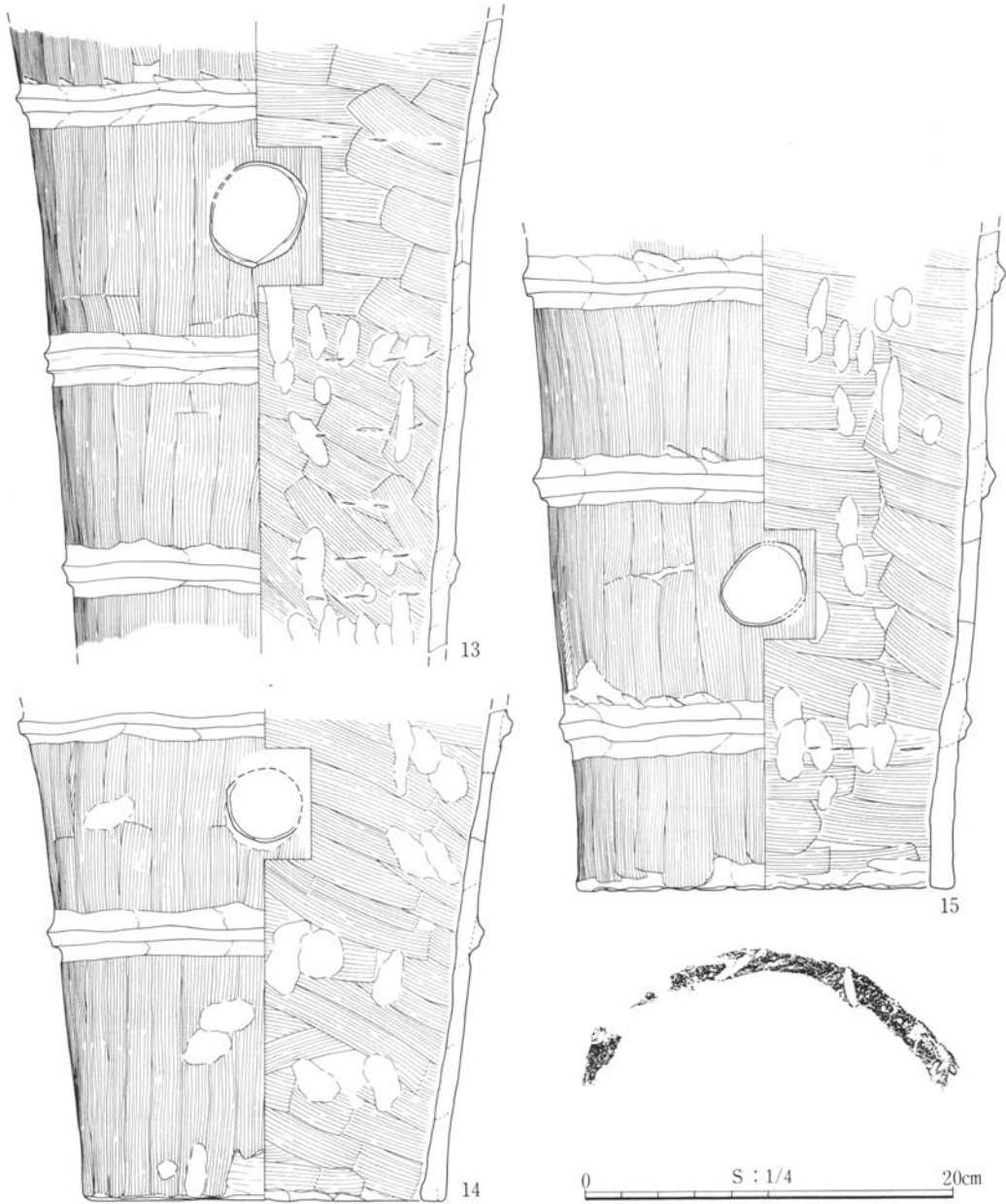
面にも横方向のハケ目が丁寧に入れられている。突帯は低い为上辺の稜はシャープに作り出されており、丁寧に整形されている。透かし孔は、ヘラで切り抜いた後さらに丁寧に微調整を施

10は、口縁部から最上段の突帯と透かし孔上端までが復原できた資料で、焼成部の床上より出土している。口径の復原値は30cmを越える大型なものとなった。外面の調整には7本/cm単位のタテハケが入れられており、最上段については二次的なタテハケが施されているようである。

11は、口縁部から上2段の突帯までが復原できた資料で、焼成部中央の床上より出土している。口径の復原値が26cmと他の資料に比べてやや小型である。口縁部形態は、口唇部下端が外側にのびず、やや丸みを帯びている。外面の調整には二次的なタテハケは見られない。

12は、口縁部から上3段目まで復原できた資料で、焼成部奥の床上より朝顔型埴輪片の上に重なって出土している。口縁部の上端が上方に鋭くのび、突帯は幅が狭く断面形が台形をなしており、他の資料とは異なるタイプのものである。このタイプの口縁部形態については他に断片的ではあるが類似した資料が認められる(47・48)。

13は、口縁部と底部が欠損した資料で、焼成部床上より出土している。復原径が約27cmとなる大型なものである。器面の遺存状況は悪いが、外面には7本/cm単位のタテハケ、内

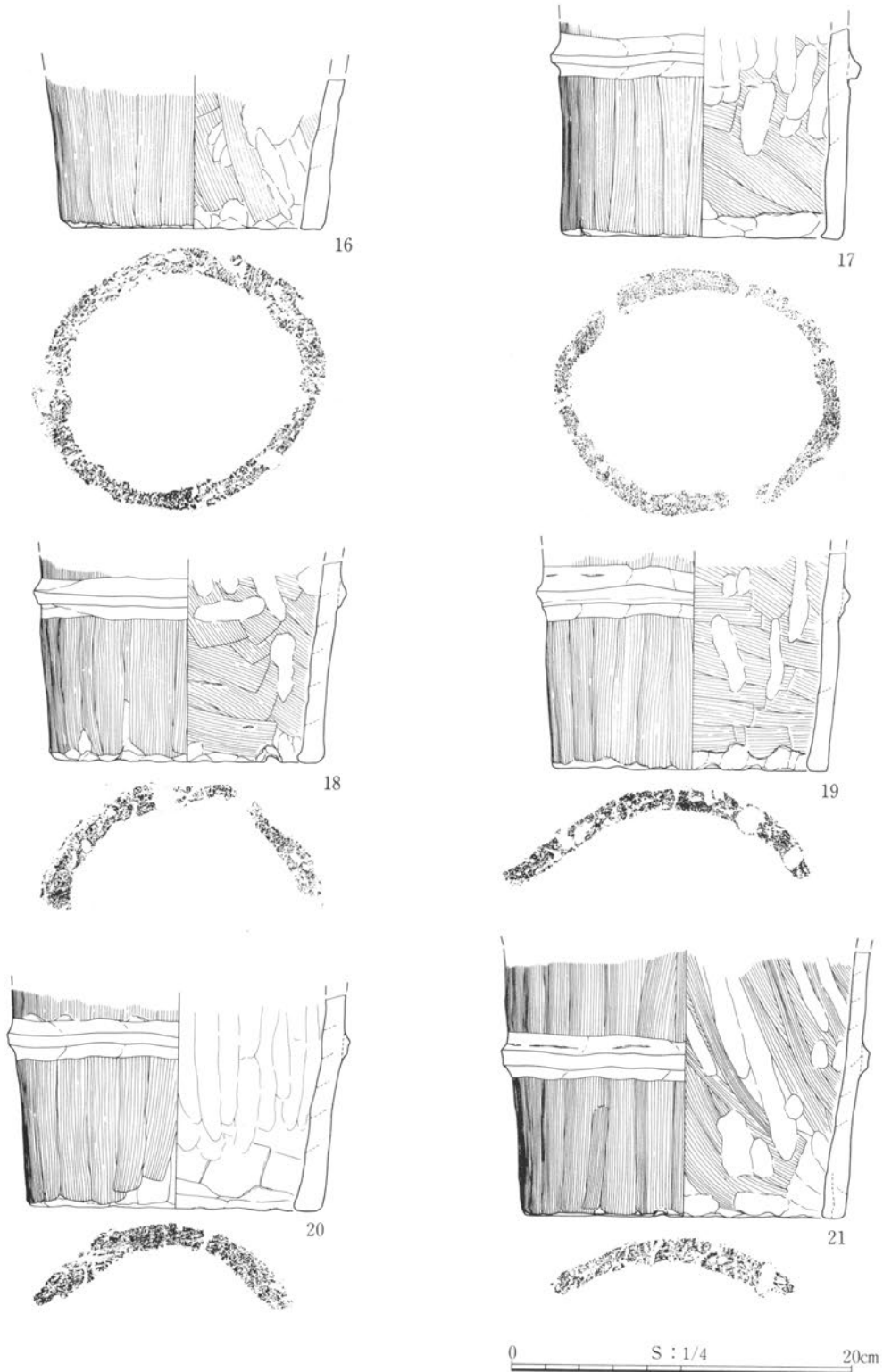


第14図 51-001出土円筒埴輪 5

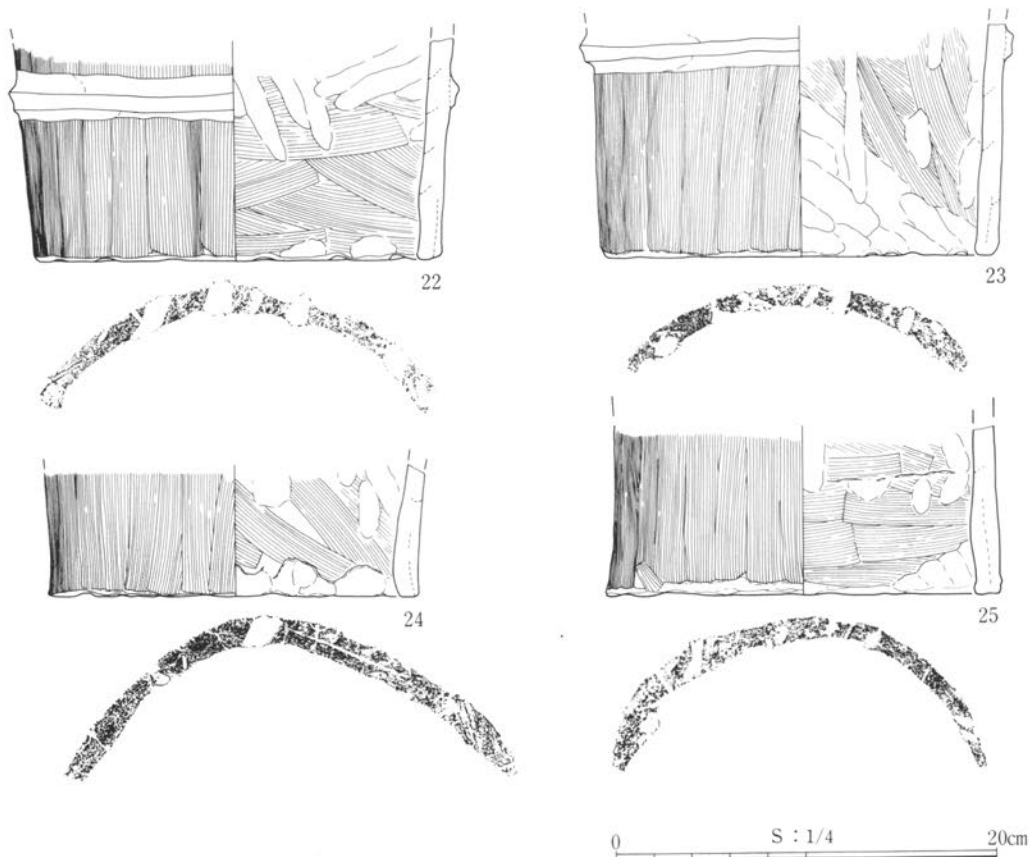
して整形している。

本遺跡出土埴輪の突帯は、形態的にはほとんど同じである。断面形はM字形で、拓影図49～56でもわかるように貼り付け及びその後の調整はかなり丹念に行われており、そのため必ずしも高くはないにも関わらず、上辺の稜などが非常にシャープに表現されている。

14は底部から2段目の突帯まで、15は底部から3段目の突帯まで復原できた資料で、燃烧部の床面より出土している。いずれも底径が20cmを越える大型のものであるが、底部の器肉の厚



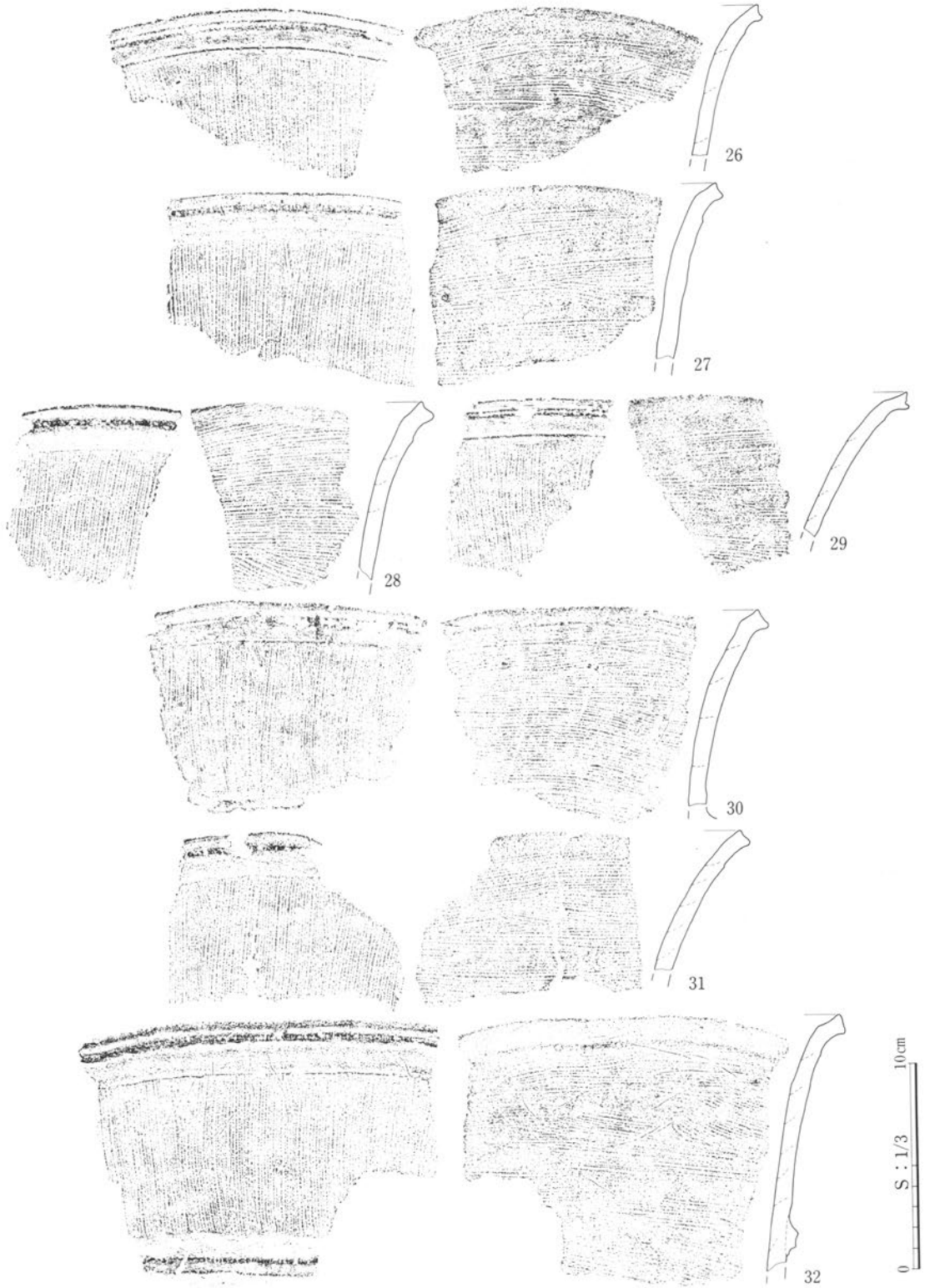
第15図 51-001出土円筒埴輪6



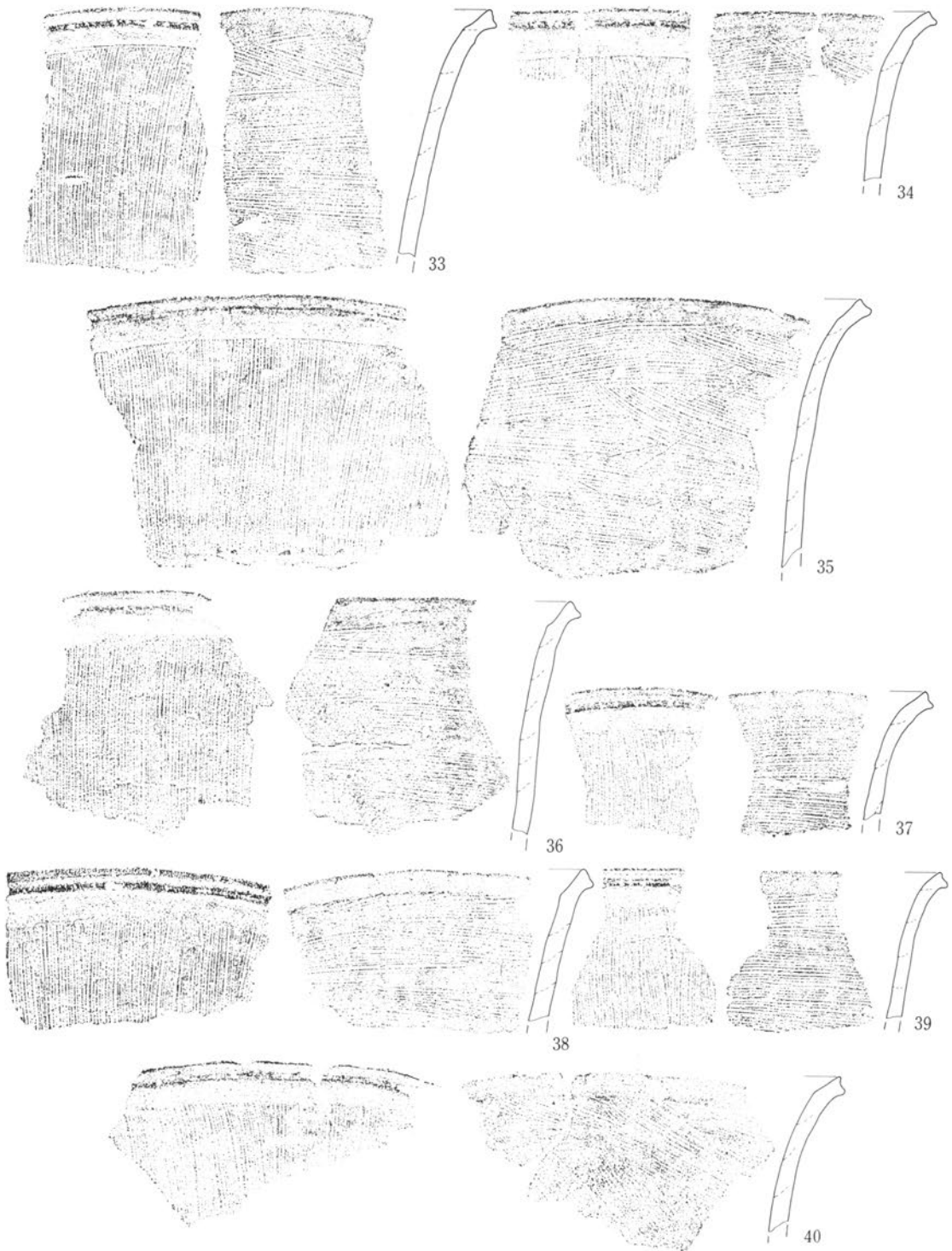
第16図 51-001出土円筒埴輪7

さは特に肥大化せず薄手に仕上げられている。外面の調整は7本/cm単位のタテハケが底部から間断なく丁寧に入れられており、内面も指ナデの後、横方向にハケ目が施される。

16～25は、焼成部床上より出土した底部資料である。この中で16～20は底径15～18cm、21～25は底径20cm以上のもので、サイズに2種類のタイプが認められる。器肉の厚さは、大型のものも他の部位と大差なく薄手で、焼成時の歪み以外に自重によって形くずれしたような資料は認められなかった。外面の調整は、拓影図(第18図32～19図41)にも見られるように底部から7本/cm単位のタテハケが右回りに丁寧に施され、内面にも径の大小に関わらず基本的に下までハケ目が入れているが、20は底部までハケ目が達していないためか指ナデ痕のみ残す。

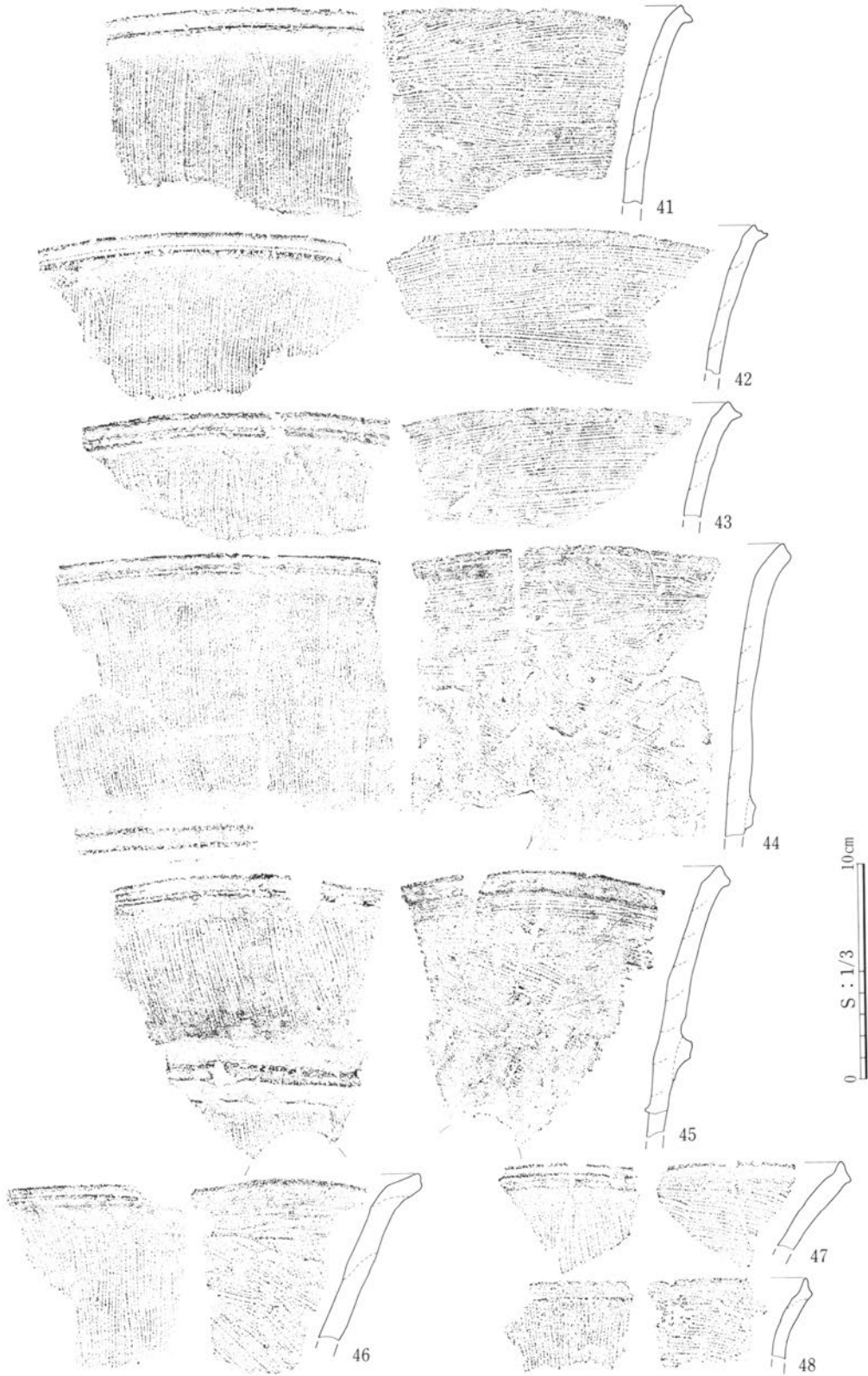


第17図 51-001出土円筒埴輪拓影図 1

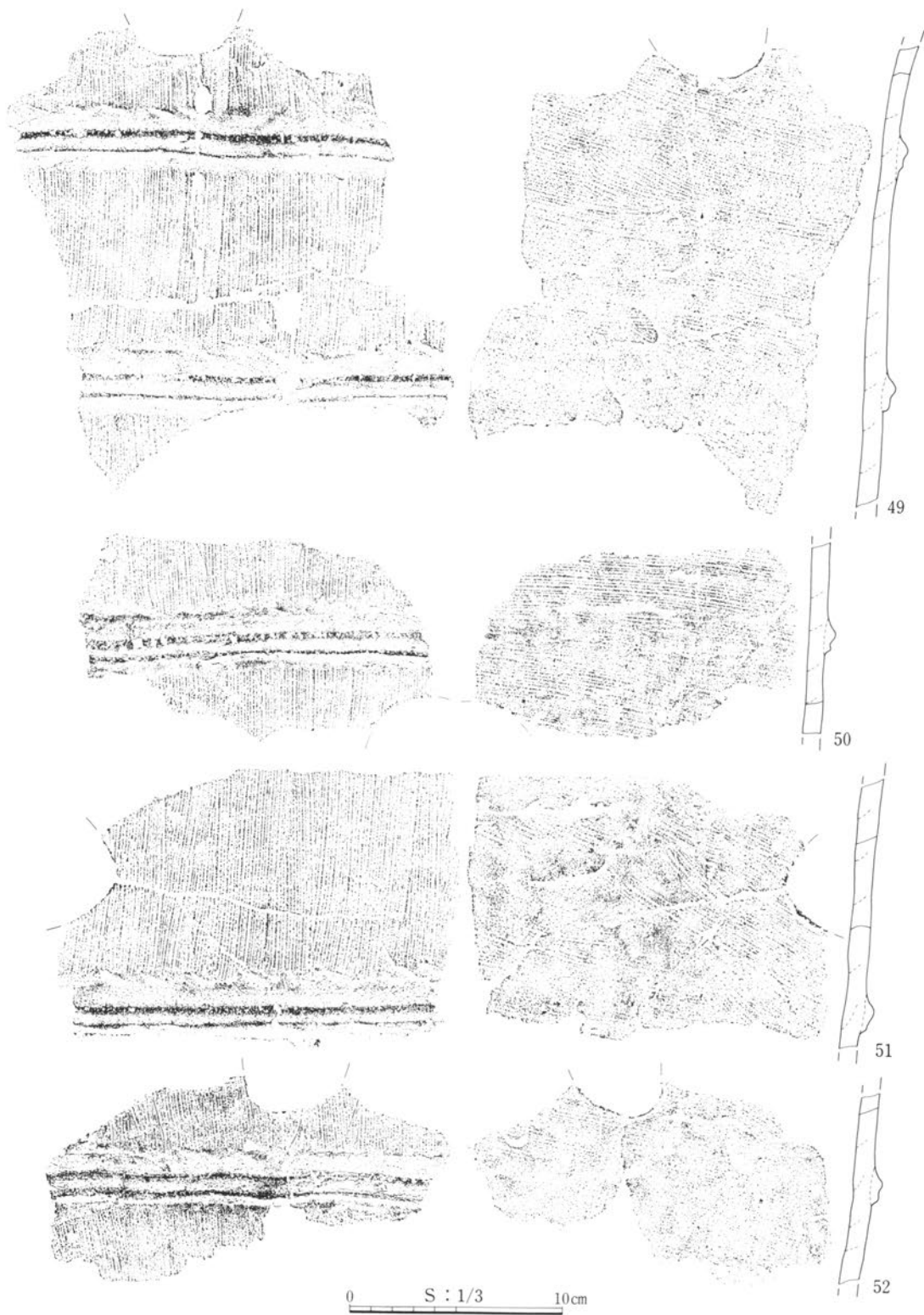


0 S : 1/3 10cm

第18図 51-001出土円筒埴輪拓影図 2



第19図 51-001出土土筒埴輪拓影図 3



第20図 51-001出土円筒埴輪拓影図 4